

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

も う

M・O・H通信

M・O・H communication

24号

2009
Summer



特集:人づくり「温故知新」

(photo) 辻村耕司

2009 Summer

M・O・H通信
24号
特集:人づくり
温故知新



contents

目次

特集「人づくり」―温故知新

M・O・H対談― 働くために学び、働きながら学ぶ―循環型キャリア教育をめざして
共に働き、共に生きる”人づくり” 板倉 安正 & 森 建司……………5

M・O・Hレポート― 簡素で豊かな生活を大切に―大津友の会
暮らしの中に、志(こころざし) 丹原 敦子……………13

M・O・Hレポート―2
パインのカ―ものづくりは人づくりから 上田 豊……………19

M・O・Hレポート―3 百年たつても生きる建物
京町家再生に思いを込めて 小島 富佐江……………27

M・O・Hレポート―4 私たちの幸せのために祈る動く微笑む
佛門に帰依した青年、今を精一杯生きる 高橋 浄徳……………35

M・O・H対談―2 経営に心と道―正しい経営が正しい社会を生む
経営道を貫く 西田 芳克 & 森 建司……………39

ちよつとひつぎ
関ヶ原合戦の武将達 佐々木 洋……………47

MOHECOTOURISM―11
上高地の確かな役割 檀上 俊雄……………49

表紙写真:高島市椋川の風景。昔ながらの『牛と人の水回し作業』。牛の名前は“はるえちゃん”滋賀県立大学に所属する小太りの黒毛近江牛。馬鍬(まぐわ)を押す人は滋賀県立大学の黒田教授。先導は椋川住民の井上さん。



野洲川の忘れられた景勝地「赤岩」

ショート・ショート

ふれあい 第14回 「一日一生」

中井二三雄……………52

「癒しの森へようこそ!!」(漫画)

オノミユキ……………53

愛する風景

「花びら」 畑 裕子……………57

日本の精神

「自分づくり」に挑戦しよう! その一

井上昌幸……………59

〈商家の家訓の話 第九回〉

近江商人の幼児教育論 末永國紀……………63

環人会現場研修会⑦―

「新江州」と「どっぽ村」の取組みを探る

……………65

心温まる物語

「みどりの川のぎんしよきしよき」

今関信子……………67

講演日記……………69

お知らせ&ニュース……………70

里のお話

「山室湿原」 三山元暎……………71

本の紹介……………72

通信概要……………73

読者の声・せんりゅう……………74



「MOH」のマーク=牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★M・O・H通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M
O
H

- **循環** 他者の生命を奪って得たものを使わせて頂く
- **共生** 人は一人では生きられない、環境によって生かされている
- **抑制** 欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

将来に向かつてのカーボン排出量削減に関して、国際間においても議論が交わされ、理想には遠いものの、漸く足並みも揃い始め、さまざまな試行錯誤を経ながら、少しずつ前進が見え始めてきたこのころである。

しかも、現状では皮肉な事に（あるいは幸いなことに？）1

00年に一度とか言われる経済不況のなか、劇的な需要の減少があつて、世界の産業界、特にエネルギー消費大国の生産活動が停滞し、まだ、データとしては目に見えていないが、おそらくカーボンの排出量は、瞬間的だとしても相当に削減されている事が想像される。その意味で言えば、このままこの経済状態が継続すれば、少なくとも低炭素社会は遠からず実現する状況にあると思うのであるが、残念ながらそうは間屋が卸さないだろう。

世界各国が不況脱出の政策的努力として、大きな財政赤字を抱えながら、

産業活性化のために巨額の資金を投入している。国民の苦難を救うためにやむを得ないことではあろう。またオバマ大統領の言葉を借りるまでもなく、環境対応型の産業拡大に期待して支援施策が打たれようとしているのも事実

よいというものではない。経済至上主義がもたらしたように、自動車や住宅のような耐久消費財を、取って消費財として短期間に廃棄をさせて、更なる高機能の新商品を購入させていく手法は、右肩上がりの大量システム化を金科玉条とする悪しき経営理念に基づくものであり、持続可能型社会においては否定されなければならない考え方なのだ。

「環境と両立する

経済とは」

森 建司

われわれは極端な貧困に耐えられないのは当然であるが、経済の大量システムが生んだ格差社会や、地球の崩壊に繋がりがかねない経済至上主義社会に戻ってはならない。経済は人間社会に末永く幸福をもたらす手段の一つでなければならぬのだ。

である。ただ、低炭素化社会の実現に向けて期待される未来の産業として、太陽光発電のような自然エネルギー、あるいは省エネ、脱エネの産業にしても、かつての自動車産業、情報機器、家電製品のような巨大産業に育てれば

環境と両立する経済の復活はもろくも人望むところである。しかし、その経済とはなにかについて、自立した意識で、心豊かな人生観、価値観を持って改めて考え直さねばならないときがある。



■人づくり — 「温故知新」



●対談

板倉 安正 vs 森 建司

滋賀短期大学 学長

循環型社会システム研究所 代表

〈人づくり「温故知新」—①〉

共に働き、共に生きる “人づくり”

**働くために学び、働きながら学ぶ
——循環型キャリア教育をめざして**

社会で力強く羽ばたく人間を、どう育てるべきか？ 人づくりに求められる一番の要素は何なのか？

「板倉プラン」と名づけた教育方針の中で、循環型キャリア教育の推進を提唱される滋賀短期大学学長 板倉安正さんに森代表がお話をうかがいました。

■滋賀短期大学／大津市竜が丘24-4

■2009年4月

■働くことに視点を置いた教育

森 板倉学長は、人づくりとは何だと
思われますか。

板倉 基本的には教育ということでしょうね。今、教育というと、学力を上げる、有名大学に入ることだと思われるがちですが、本来は、働くため、生きるためにあるということについて、皆さんの意識が薄くなってきている。しかし、人間が作る社会というのは、新しい次の世代の人がそこに加わって、これまで社会を支えてきた人と一緒に働き、生活し、また次の世代へ伝えていくという流れですから、もっと働くこと、生きることに視点を置いた教育がなされてもいいはずですが、どうも忘れられている気がします。

森 同感です。特に中小企業の場合、この商品は売れるか、あの人間は信用できるか、ゆっくり理論だてて検証しているヒマはありませんから、直感的な判断が求められます。教育でいえば理論よりも実技重視です。ところがこの実技というのが、まさに忘れられて

いるんですよ。

板倉 もともと教育とは、そういうところからスタートしたと思うのですが、今は何か、専門化したというか、目標が狭くなったように思います。言い過ぎと云われるかもしれませんが、今の学校教育はどこにどう進学させるかということにしか集中していないように思えます。しかし基本は、一緒に働くということであり、もっと原点にもどれば一緒に生きるということです。急に本学の話になって恐縮ですが、本学の学生には、入学したその先に自分も社会人となって皆と一緒に働く将来があるということを見つめて、自分にとっての仕事に就き、社会の中で生きていくのだという意識を常に頭の中に持ちながら学んでほしいと願っています。

■在学中も卒業後も、自分を伸ばせる自分育て

森 こちらの学校では、卒業後のキャリアデザインを見通した一貫教育（循環

型キャリア教育）“を方針として打ち出しておられますね。企業の側からすれば、有難い教育方針だと思います。”

板倉 ありがとうございます。今、キャリア教育という言葉がありますね。地域体験や職場体験等を通じ、子どもたちにキャリアというものを意識させるのが目的だと言われています。私も滋賀県で推進に関わらせていただきましたが、そもそもキャリア“career”とは何なのだろうと、辞書で調べたんです。すると、“progress through life”と記されています。つまり生涯にわたって、自分をどう伸ばしていくか、高めていくかということがキャリアであり、それを自覚させることがキャリア教育なんです。

森 非常に奥深い言葉ですね。二年間はあつという間でしょうから、社会への扉を開くことを、意識しなさいということですね。

板倉 おっしゃるとおり、二年間というのは物凄く短いんです。ですから我々は、実学教育に徹しているつもりで、できるだけ資格を取って、社会に出て



「生きる力を獲得してほしい」板倉氏

働きなさいと指導しています。しかし、資格を取るだけでは、学生にとって、スーッと通り過ぎたような学校生活になつてしまう恐れがあります。ですからこの二年間は短かったけれど、本当

に有意義に学んだという実感が得られるようであつて欲しいものです。ここでの二年間があつたから私は今こうして働いているんだと、いつでも母校に帰ってきてくださいという意味も込め

て、自分を振り返ることができるようであつて欲しいと思うのです。そのために、我々指導する側は、「あなたたちの卒業後を指し示し、見通せるようにしています。だから、あなたたちも卒業後を見通して学んでみませんか」という呼びかけをしていきたい。

森 今の若者に、見通しを持つてというのは難しいと思いきや、自分の生き方を見通して、それが実現できる世界に飛び込む若者が意外に少なくないんです。そうした若者の多くが、自然に帰るといふか、自然と暮らす生き方を選ぶようです。ですから私たち大人も、経済社会の基準で学校教育を考えるのではなく、第一次産業に就きたいというような学生も想定して、それぞれに生きる道をつけてあげられるような、教育のあり方を考えないといけないと思います。

板倉 私よく話しているのですが、全国一斉の学力テストを実施して、自分の県は他府県より平均点が5点高かったとか、そんなことを目指すべきではないし、目標にしたところで、何の意味も無いと思うんです。学力が不要

だといっているのではないのです。学力テストにとらわれることなく、本当にその分野で世界を引っ張るような人というのは、まわりが一生懸命お膳立てをしてくれても、自分で学び、育つものなんです。ですから、今大切なのは、基本的な学力を教育するために何をやらなければならないかということで、それは生活の基本的なマナーと基礎的な学力の習得に尽きると思います。今の社会はこれだけのレベルに到達していますから、この社会ではこれだけばかりんと身に付けて、守りましよう。これは、学校教育でやるべき仕事だと思います。

人づくり
——
社会は模範を示しているか？

板倉 我々がいう実学教育とは、基本的には“生きる力”をつけることなんです。生きる力とは、人生では色々な場面に遭遇しますから、その場面ごとに、いかに対応できる自分をつくっていくかだろうと思います。

「マナーを身につけて」森氏



森 近所づきあいもあれば、家族との関係もある。だからこそ、昔の人はマナーを教えることから始めたんですね。私も丁稚時代、商売と一緒に行儀作法を徹底して仕込まれました。ところが今の企業はマナーをあまり教えずに、新人を外に出すんです。それで、先方との関係が上手く築けず、上司が頭を悩ますケースが多いんです。私は

これも、偏った教育がもたらした結果だと思っています。
板倉 今の学生について聞かれると、大人はつい、他者とのコミュニケーション能力が低いなどと答えがちですが、もとをただせば社会が模範を示していないんです。だから私は、問題はすべて大人にあると、そういう目で捉えなければいけないと思っています。

板倉 今、大学に関して言えば、問題なのは入試における偏差値依存症です。全国の同学年の成績がすべてデータベース化されていて、それで自分は何の値であるかと振り分けられています。

しかし、偏差値というのは「生きる力」にとって、全然関係のない数値なんです。また、私のところの学生の話で恐縮ですが、本学を志望する場合、高校の進路指導の先生に「四大は少し難しいから短大でどうですか」と言われ、その流れで入学した学生も何人かはいるようです。しかし、本学に入学してから、優れたリーダーシップやすばらしいバイタリティを發揮する子が、必ず現れます。その元気に活躍している学生が言うのです、「中学校や高校時代には、自分より偏差値の高い人がこういう役をやるのだと思っていました。私にはできないものだ」と。本学の学生を見てください、学生は二年間で変容してくれます。本学に来て、何かをきっかけに自分に自信を持ってくれるのです。うれしいことです。そうすると、社会への巣立ちも比較的スムーズ

にいくのではないかと思います。

森 そういう学生は、社会でもきつとがんばれるでしょう。

板倉 はい、それを期待しています。重ねての話で恐縮ですが、偏差値というものが、いかにいい加減な物差しであるかです。偏差値による輪切りを押し付けられて、今の子どもはかわいそうです。人間同士が生身でぶつつかって、競い合って、相手の個性や能力を知るような、そういう機会がほとんどないまま大人にならざるをえないのですから。

■どの子どもにも「師」は必要

森 私の知人に、中学時代はぐれていただけ、鉄工所の親方について働きたけだした途端、見違えるほど真面目になって今は立派な社会人、というのがいます。これはひとえに親方のお陰なのですが、それまでに親や教師がどれほど良い方向へ導こうと苦心したかわかりません(笑)。教育の難しさは、こういう点にもありますね。

板倉 どの子どもにも師は必要です。

誰かが導いてやらないといけないというのは真理だと思えます。問題は、その師が誰かということです。先生と生徒を同じ箱に入れておいたら、一律に先生が師になるとは限らないところが難しいんですね(笑)。その子が何をきっかけにパッと変わるのか、理屈で説明できるものではありませんし、一人ひとりがそれぞれに違います。

森 例えば中小企業は、ほんの数人を採用して社員教育を行うでしょう。誰かが社員教育の隙間からこぼれ落ちるということは、まずないんです。ですから、師としての役割も、長い目でみれば我々企業が果たしていくべきか、と思えます。しかしその一方で、私が思うに人を大事にし過ぎる面もある。今は小学校にスクールカウンセラーがおられますね。少しお話を聞いたのですが、例えば失敗して落ち込んでいる子どもがいるとします。カウンセラーはまず、その子が内向型か外向型を見極めて接し方を考慮されるそうです。私の意見は違って、まず「この悔しさを



悔しさは人生のスパイスですね。

忘れるな」と言うでしょう。でもそれは、昔の教育なんだそうです(笑)。しかし、あまり分析というのはどうなのかと、疑問に思うのですが。

板倉 心理的に分析すれば解決するというものではないでしょうね。失敗しても、なぜまたがんばるかというと、やっぱり「こんちくしょう!」という気持ちがあるからですよね(笑)。小さい子どもが砂場で遊んでいるのを見ていると、誰に言われているのでもないのに、同じことを一生懸命繰り返し、繰り返し挑戦しています。教育に、個々への対応というものが求められるようになり、その上で「至れり尽くせり」の傾向が進んだ部分はあると思います。しかしそれだけでなく、

教育には「獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす」という側面も必要なので。同じ一人の子どもに対しても、ある時は厳しく接し、ある時は優しく受けとめること、あるいは、ある時は一人に任せて、ある時は丁寧に指導すること、が必要なのだと思います。しかし、そうした対応も含め、今は何でもマニュアル化しようとしています。私はこれも問題だと感じています。

森 社会のあらゆる現場で、その現象が見られますね。しかし基本は、相手との人間関係であり信頼関係ですから。それ無しでマニュアル云々といったところで、不信感や不満が募るばかりです。

板倉 人間が社会をつくることができるのは、基本に信頼関係があるからなんです。そして社会というのは、皆が一緒に働き、一緒に生きるのだという共通理解がなければ、成り立ちません。

ですから、今、必要なのは、せめてこれだけは失わずに社会をつくりましょうと、そう分かち合える環境づくりが大切なのではないでしょうか。

百年に一度の不況で、 子どもの目に映るのは？

森 では最後に。今回の不況で、これまでのような経済社会が本当に幸せな世の中なのか、見直しが進むと思うのです。子どもたちにも、お金があるから人は幸せなのか、偉いのか、それを考えるきっかけになればと、期待しています。

板倉 こういう状況は、ありがたいことに、と言おうか、反面教師ですね(笑)。小学校低学年の子どもたちの行動を見ていると、自分たちの集団の中で「ちゃんとしてよう」という意識を持っています。本学でも、各先生のゼミ毎の学生の動きを見ていると、それぞれの集団の中で、何となくルールが出来上がっていて、個人の自由も大事にしつつ、コミュニティとして上手くやっていますとすると、大人よりもちゃんと社会ルールを持っているのかもしれない。森 そのルールを大人社会と経済社会だけが、破ってきたということですね。

模範となる大人のキーワードは人を大切に。附属幼稚園をバックに。



板倉 大人が悪いというのは、そこなんです。最悪なのは、百年に一度の大不況といわれる中で大手企業からリストラを始めたことではないでしょうか。子どもたちは、社会の様子を物凄く敏感にキャッチします。大人の社会のルールはこういうものかと、そう感じた子どもも、きっと多いはず。学級

崩壊だと大人は騒ぎますが、それは子どもたちが、大人社会の崩壊を先に見てしまっているからだと思います。まわりの大人は、担任の先生は、ルールをきちんと決めて、自らそれを真剣に守ろうとしているか。校長先生は、確固とした理念・倫理をもって、様々な場面に臨んでいるか。トップの人間が



伸びやかな校内。食堂をバックに。

やるべきことをきちんとしていれば、子どもたちは何も言わなくてもそれに倣います。

森 私も孫に見せる姿は反省すべきことが多くですね(笑)。

板倉 とてもシンプルなことなんです。お互いの人間を大事にしましょうという。あえて経済人の方に言わせていただくならば、松下幸之助さん式の「人を大切にする」経営をお願いしますという事です。

森 「人を大切に」ですね。本日はどうもありがとうございました。

板倉 孝心

●いつ/いつ やすまざ 1940年、滋賀県生まれ1964年、大阪府立大学工学部卒業。1966年、同大学院工学研究科修士課程修了。工学博士。京都工芸繊維大学 工業短期大学助教授から滋賀大学教育学部教授を経て、2006年、滋賀短期大学の五代目学長に就任。亦外線環境計測及び土砂防災科学技術の研究ならびに技術教育及びキャリア教育の事に関わる。国内の電気学会、日本亦外線学会、日本産業技術教育学会等で役職を歴任。代表的な著書・論文 編集代表／Integrated Environmental Management : Development, Information, and Education in the Asian-Pacific Region, Lewis (CRC Press) (1999)

共著／最新の遠赤外線技術、電気学会論文誌A-1999 pp949-954(2000)
Spatial-Filtering Velocimetry, EOE (Encyclopedia of Optical Engineering), Marcel Dekker, Inc.pp2607-2617(2003)
中学校技術教育における情報倫理・画像電子学全誌 Vol.33, No.4-A pp450-454(2004)

●滋賀短期大学 〒520-0803
大津市電が丘 24-4
<http://www.sunfire.ac.jp/>

●滋賀短期大学案内09



「生活学科」製菓マイスター／生活クリエイト／食健康、「幼児教育保育学科」(ビジネス)コミュニケーション学科)ロツステイクビジネス／ビジネス実務／ITビジネス／ホスピタリティビジネス／健康ビジネス「就職に強い」

勇気凛々 いの壁を打ち破れ 森 建司

●もりけんじ 1936年滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州株代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など
著書／吃音はなめる「遊タイム出版」「循環型社会入門」新風舎、「中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営」サライズ出版。

M・O・Hレポート1
へんづくり「温故知新」——②

暮らしの中に、志

いっしょに



丹原 敦子

大津友の会 2008年度 総リーダー

簡素で豊かな生活を大切に—— 大津友の会

さる3月6、7日の両日に開かれた「大津友の会の集い」におじゃましました。“今をどう暮らしたら良いのか”をきちんと考え、よい家庭からよい社会を作るために行動する女性たちをレポートします。

- 大津友の家／大津市逢坂
- 2009年3月



羽仁もと子著作集の数々

全国友の会——『思想しつつ
生活しつつ 折りつつ』

大津友の会は1947年に創立し、61年を迎えます。同会は1930年、雑誌『婦人之友』の熱心な読者らにより結成された「全国友の会」のひとつです。

『婦人之友』は、日本で初めての婦人記者として活躍した羽仁もと子（1873～1957）が、夫・吉一とともに1903年から刊行を開始し、創刊106周年を迎えた今日にいたるまで、「よい家庭が、よい社会を創る」という信念を一貫してきました。

また羽仁夫妻は、自由学園（東京都東久留米市）の創始者であり、映画監督・羽仁進氏の祖父母です。そして、『婦人之友』といえば、家計簿を連想する女性も多いはず。雑誌創刊の翌年、日本で最初の家計簿を発行したもと子は、予算生活による家庭経済の経営という観点を、多くの女性にもたらしめました。

全国友の会は、よい家庭経済を築くこととともに、「思想しつつ 生活しつつ 折りつつ」をモットーとして、衣食住・

家計・子育てについて、女性たちが世代を超えて、学び励みあう姿勢を連綿と受け継いできました。現在、日本各地から海外まで188の友の会があり、会員数は2万2千人にのぼります。

くらしを導く書籍盛り沢山



■ 婦人之友
創刊明治41年、106周年、通巻1272号を数える老舗の月刊情報誌。「生活をクリエイト」を特集テーマにし、毎月多彩な切り口で暮らしの実践方法を紹介。定価710円。婦人之友社。申込はFAX03-3982-8958。



羽仁もと子(左) 吉一(右) 夫妻

「家庭から社会へ」 働きかける「ごいごい」

大津友の会は、さる3月に第15回「大津友の会の集い」を開催しました。この集いは、いわば一年の学びの集大成であり、「明日も元気に ここちよく」という会のテーマのとおり、明日への新たなスタートでもあります。

本年度、大津友の会の総リレーを

務める丹原敦子さんにお話をうかがいました。

丹原 私たちの活動の特徴の一つは、予算のある家計簿をつけるということ。ただ収支を記録するだけでなく、家計の予算を立てて、予算を守り生活を工夫することは、なかなか難しいものなんです。

女性として、毎日の生活を大切に、

家計簿のほか
に料理や育児
など、暮らしに
励むことが、
家庭から社会
への働きかけ
となり、それ
によって、よ
りよい社会を
つくりましょ
うと呼びかけ
る。羽仁もと
子先生の思想
は、時代を超
えて共鳴でき



地産地消の食品も充実

るものだと思います。

大津友の会の会員は現在、150名
余り。30代から90代までと幅広い層が
参加しています。

月に一度、全体で行う例会のほか、
ご近所単位で集まる「もより会」、さら
に家計簿や食など関心ごとにあわせ、
グループを自主的に設けています。

● “暮らしの本質”を伝える

丹原 祖母の代から『婦人之友』を愛読
しているという家庭があるように、友
の会も祖母、母、娘と親子三代で会員
になられる方もあります。やはり皆、



〈人づくり — ②〉

丹原

友の会は全国各地にありますか

めざすものは同じなんです。それを年代を超えた交わりの中だからこそ、伝えていくことができるんだと思います」

丹原さん自身も、親元から遠く離れ、ご近所さん程度しか知り合いがいない環境で、たまたま友の会の存在を知り、入会を決めたそうです。



「かしこいお金の使い方」を研究発表

はわかりませんが、今度は私がお返しをする番だと思っています。

豊かさとは何であるか、考えさせられることの多い昨今。便利だけれど消費することだけが異常に発達した暮らしに、疑問や危機を感じる人が、増えています。食べるものや着るものについて最近の手づくり、手仕事ブームは、さやかでも生産することを望む消費者

ら、転勤族の主婦には強い味方なんです（笑）。年代を超えた皆さんとかれあえて、自分の世界も広がります。私も子育ての悩みなど、先輩の会員に助けていただいたし育ててもらいました。どこまでできるか



刺しゅうを習っています。完成が楽しみ

者の心の変化かもしれません。それと同様に、個とは何かを考えるべき時に来たのではないでしょうか。今の時代だからこそ、友の会が社会に果たす役割は、ますます大きくなるといえそうです。

お試しあれ！”鍋帽子®を使った
ゆっくりにんげん・レシピ

大津友の会の集いで行われた「鍋帽子®クッキングコンテスト」では、会員の皆さんから寄せられた20数作品の中から、試食を重ね好評を得た料理をご紹介しましょう。



鍋帽子®クッキングをご紹介します



鍋帽子®を作っています。ざるを型にしてキルティングの要領で針を通します。綿をつめこみ、小さな布団みたいですよ。



丹原 鍋帽子®専用のレシピというのではなく、カレーやおでんなどの煮込み料理を、鍋帽子®で保温調理します。ガスや電気の使用を最小限にとどめ、ゆっくりに調理することで、マイルドな仕上がりになります。たとえばお肉のかたまりも、中までジュューシーに仕上がります。

では、受賞作品の中から、レシピを二つご紹介します！

☆経済的で賞
「キャベツのカレー煮」
宮浦眞澄さんの作品



スパイシーな風味とキャベツの甘味が美味

【材料】 キャベツ1/2〜1個 玉ネギ1/2個 ツナ1缶 ニンニク・シヨウガ各1片 カレールー80g (1/2箱) オイスターソース大さじ1 サラダ油大さじ1

【作り方】

1. キャベツは4〜8つ割りに、玉ネギは繊維にそって薄切り。
2. 大鍋にサラダ油をあたため、ニンニクとシヨウガのみじん切りを香

りが立つまで炒める。

3. 玉ネギを2に加えて、しんなりするまで炒める。

4. ツナとキャベツを加え、水3カップとカレールーを入れて煮立たせる。

5. 火を止め、ヘラでゆっくり混ぜてルーを溶かしたら、もう一度煮立たせ、鍋帽子[®]をかぶせて30分おく。

6. オイスターソースを加えて完成。

【おすすりコメント】
カレーとスープのあいだのトロミ、おいしいおすすりです。

☆豪華で賞

「合鴨オレソジ煮」
白井朋子さんの作品

【材料】 合鴨ロース（または鶏の胸肉）1枚 煮汁／白ワイン150cc 酒150cc みりん60cc 砂糖大さじ4 濃く絞ったしょう油100cc みかんの絞り汁100cc

【作り方】

1. 合鴨は余分な脂身を取り、筋があ

れば切る。フライパンで皮目から弱火で焼き、キツネ色になったら裏返して反対側もサツと焼く。フライパンから取り出し、熱湯をかけて油抜きをする。

2. 鍋に煮汁の材料を合わせて火にかけて、80℃に保ちながら約10分間煮る（沸騰させないよう）に注意。

3. 火を止め、鍋帽子[®]をかぶせて20〜30分おく。煮汁と合鴨は別々に冷ます（できれば急速に冷ます）。

4. 冷めたら合鴨を煮汁につけて味を含ませる。

5. いたたくときは薄く切り、上から煮汁をかける。

【おすすりコメント】

我が家のお客様料理ナンバーワンです。鴨肉は火を通しすぎるとかたくなりますが、鍋帽子[®]を使うと最高の仕上がりです。

※鍋帽子[®]は全国友の会振興財団の商標登録です。鍋帽子[®]の詳しい作り方は、こちらの書籍でもチェックできます！
●婦人之友社刊
『シンブルライフをめざす基本の家事』17855円

『読者と歩んだ世紀展図録』10000円
（ホームページ <http://www.fujinotomo.co.jp/> から）注文は別冊）

※作り方の講習、販売については、大津友の会にお問い合せ下さい。

生誕を大甲に

大津友の会

丹原敦子

● たんばの あつこ 1951年岡山県生まれ。結婚と同時に滋賀県に転居。1987年に大津友の会に入会。2008年度の総リリーターを務める。三男二女の母。栗東市在住。

● 大津友の会 所在地／大津市逢坂1-9-20（JR大津駅前口から徒歩5分）
TEL.FAX.077-526-3992-1
● 全国友の会
<http://www2.ocn.ne.jp/~zentomo/>

パインの力 ものづくりは人づくりから



つつい手がでるパインアメ



上田 豊

パイン株式会社 代表取締役社長

穴の空いた黄色い飴といえば「パインアメ」と誰もが思い浮かべる。飴玉は丸いものという既成概念をくつつがえずパインの輪切りを模した飴。口の中に放り込むとつい舌の先で穴を確かめずにはいられない。鼻先に香る甘酸っぱいフレーバーに一瞬異国情緒が漂う。そんなパインアメが生まれた土壌を知りたいと、パイン株式会社でお話を伺いました。

■パイン株式会社／大阪市天王寺区

■2009年4月

◎ 普通じゃない発想を

黄色いジャンパー、袖部分は緑色、パイナップルのネクタイ、パイナップル型カフス、トータル・パイナップルコーデイネートの上田社長が取材班を出迎えてくださった。向かい合って座っているとそれだけで、なんだか楽しい気分になってくる。

ここは、輪切りパイナップル形の飴や、ガムを内包した飴などユニークなお菓子を商品化してきたパイナップル(株)の社長室。

その発想力はどこから生まれるのか、と尋ねると

「われわれは普通じゃないですよ」

という答えが返ってきて、お話を伺うのがますます楽しみになった。「普通じゃない」とはどういうことなのか。

「世間にある〈普通〉というものさしではなく、人が生きるための原理原則に基づいたものさしで世の中をはかると、お金を超越したものが出てきます。当社は、単純な要素をものさしにしていきます。これとこれをくっつけたら面白いんじゃないかとね」

お料理と一緒に、調理実験が好きな人が作った料理はおいしい。そんな感覚だという。

「加工技術を使うときに、旬の素材を使って、菓子屋はいろいろなチャレンジをしています。理科の実験です。それを商品化するまで持っていく。仮説と検証を繰り返して、それが売れるかどうかは別にして、結果おいしいものができたらそれでよし。そういう創造的な活動ができる集団作りを会社としては目指しています」

そのために社員には、変人であってほしいのだという。人と同じものを作るのを嫌がる人。

「世間にこだわってばかりおらずに一歩前に出て、チャレンジしたときに新しい世界が広がる。そういう世界を味わってもらいたい」と上田さんは考えている。

◎ ユニークな発想は、共に育つ教育Ⅱ「共育」がベースに

パイナップル(株)では、「共に育つ」をモットーに

トリーに新入社員研修は社内独自の「共育」プログラムに沿って行っている。

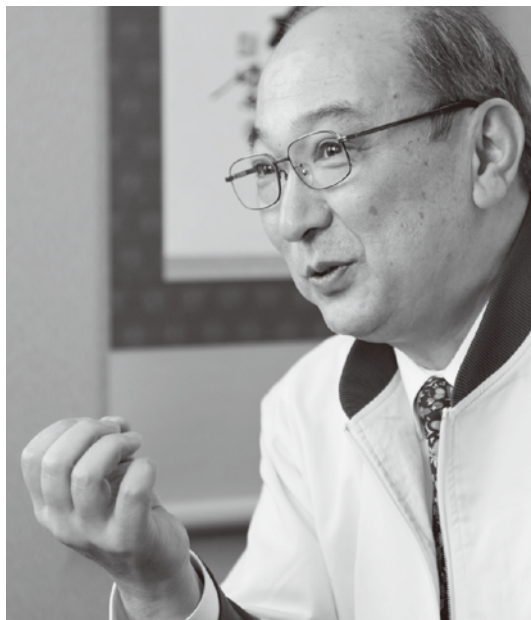
一つはQCサークル。二つめはマネージメントゲーム。計数観念を養うための直接会計のゲームである。三つめは、TO DO プロジェクト。幹部社員のもの考え方、人づくり、ものづくりを道徳も含めて根本的なものから勉強しなおし、何をやるべきかを考えるという内容である。

そこには、「ものづくりに人は人づくりこそ土台。人づくりができれば、おそらくもっと面白い商品が出てくる」という上田哲学がある。

◎ 只今、種まきの真つ最中

「もっと理科の実験を楽しめる人材を増やしていったときにどんな商品ができるかということを考えています。こんな商品を作るとか、こんな規模の会社にするとか、そういう目標は後で考えたい」

業界のナンパーワンを目指すという考え方ではなく、未知数である未来に



「70からが次のステージ」上田氏

対して大きくチャレンジする！ための”種まき“を今からしていきたいと上田さんは語る。

「本当に自分たちがやりたい強みをコツコツと愚直にやっていたら、念いが具現化し、新しい産業が絶対に生まれます」

上田さんの目が輝いた。

〇千年語るぞ

上田さんは今年で還暦。10年後、70歳。まだまだ健康だ。

だからいろんな事業の構想だけ作っておく。今の時点では、こんな点では面白いなできたら面白いなという夢物語である。それを現実の世界で人が育ってきたときに実現できるようにする。

人間の成長というのは、なだらかで直線的ではない。一定の段階までは横ばいで、その状態が続くと、あるとき、くつと変わる。そのときがチャンス。一気に投資できるような財政状態にしておいて、チャンスに耐えられる人間なり、創造的な人間をエイヤツと突っ込んでいく。

「千年も万年も生きたら事業がたくさまでできるでしょう。物理的には不可能ですが、不思議なものでその念いとい

うのは一人歩きます。だから「千年語るぞ」という気持ちでやれば、それを必ず周囲の誰かが、それも複数の人が同じ時代にもっと内容を濃くしてやりますよ。そんな会社があってもいいかな」

〇求む変人〜チャンスに耐えられる創造的人間とは

変人であること。紀伊国屋文左衛門が嵐の中でも船を出そうかというときに、「じゃあほくも乗せて」という人間、陸地の見えない世界に行っても怖がらない人間が社内に住たらいいと上田さんは考えている。

いずれ企業の中でそういう未知の分野が必ず出る。そのときに、違ったジャンルの発想に対してすつと入れるかどうか。そのためには自分の強みを相手にシンプルに説明できる自信のある人間を増やすことだ。

幼少期から20代前半までの間にやっていて、いまだに続いていることというのは、きつとそのときに自分で見つけた自分の強みだ。欠点ばかり見ない

で、ぐるっと舞台を反転させると、欠点は長所になる。

人、それぞれ多様性があるのだから、もともと持っている強みをぐっと引き出す。そういう「人財」を増やしていったときに面白い商品ができるだろう。

自分の強みを明確につかんだら、タイプ別で、同じ仕事をやってもさまざまな角度から見られるから、仕事にふくらみがでる。そうしたら、きつと毛色の変わった仕事ができるはず、と上田さんは期待を寄せる。

● 社内の人材凸凹をどうするか

大企業や行政は官僚主義的な組織だから凸凹のない平らな人材でいいだろう。しかし中小企業はそれではやれない。中小企業というのは、規模が小さい上に、新しいものを創造する際に環境整備をしなければならぬ。その場合、組織はひずみがあるほうが成長するのだ。どこかが成長するとどこかが停滞し、落ちる。必ずその部分が弱い。弱いということは強みがある。そこで

弱い部分をサポートして鍛えていける。10年も経てば、強みと弱みは逆転しているかもしれない。組織は常にアメーバのように動いているのだ。

● イエロープラン

上田さんは、毎年社内で指令を出す。

たとえばイエロープラン。

ある年、「イエローコーデイネット、でいくぞ」とバイナッブルをイメージしたジャンパーを作らせた。

またある年は、お客様にお土産としてお渡しするイエローギフトを提案。黄色い紙袋に社名を印刷するのを禁じた。社屋ビルも実は黄色だ。



タクシーの運転手さんは「ああ、黄色い会社ね」というとか

「毎年何か活性化になるようなことを考えています。昨日と少し違う私がここに居る。去年と違う私がここに居ると感じられること。その人の成長が見れたらいい。会社が成長しようと思ったら、中に居る人が成長しなければ絶対に伸びません。あわてずに、その成長に合わせて進んでいけばいい。愚直にやっていたら後ろに下がることはありません」

そんなバイン(株)の原点はどこにあるのだろうか。

● バインアメは こうやって誕生した

昭和23年、第二次世界大戦が終結し、中国へ出兵していた上田保夫(バイン(株)現会長)が帰国した。ちようどその頃、保夫の父親、末次郎は、業平本舗なりひらほんぽという米菓関係の商売をしていた。保夫はここでしばらく働いた後、「独立して商売する」と宣言した。

しかし「世の中には物資がなく闇市が開かれています。そんな中で苦勞し

ていろいろやってみた結果、落ち着いたのが、夜店の商品よりも原始的なお菓子、飴玉の商いでした」

「当時、日本は戦争に負けてGHQの管理下にありました。GHQが持ち込んだバナナ、パイナップル、チョコレートなどは高級品でなかなか庶民の手には入らなかった。そんな憧れの商品の一つにデルモンテのパイン缶がありました。保夫はそこに目をつけました」

『どうせ飴を作るならデルモンテのパイン缶をイメージするものができないだろうか。あれと同じで真ん中に穴を空けたい』

よそと同じことをやっているのは売れでも一時的だろう。ましてやそれが長続きする保証はない。保夫は暗中模索の末、バインアメを生み出した。そして昭和26年、バイン(株)が設立された。

● 穴の空いた飴は どのように作られたのか

穴の空いた飴を作るのはそう簡単ではなかった。保夫は、まず「バインの形

にするためには、丸い飴をつぶして、そこに穴を空けたらいいのではないかと考えた。

しかし、それでは形がいびつだったり、穴がきれいに空かなかったり、なかなか商品にならない。

最初は割り箸を使って穴を空けていた。すると3日もすると腱鞘炎になった。そこで、きれいな形を作りながら同時に穴を空ける方法はないかと考えた末に、考案されたのが金型である。

こうして、筋模様が入った細部にまでこだわったバインアメが誕生した。

● よそと同じことは やりたくない。だからうちは バインアメなのです。

当時から「飴にどうやって穴を空けているの?」と、人々は知りたがった。

考案された金型の特許申請中にも、大手メーカーはじめ、ありとあらゆる会社からバインアメの類似品が出てくる。ところが穴が空いた飴は非常に割れやすい。



ステキな仲間に囲まれて。右の黄色い箱が“イエローボックス”。左は駄菓子屋でおなじみの「あたり」つき。

「当社はロス率を非常に低く抑えています。仮によそさまで同じ形を作ろうとしたら効率が悪くて商売にならないでしょう」

と上田さんは自信をのぞかせる。パイナップル(株)は長い歴史の中で完成度の高い穴あきキャンデーを作ってきた。割れてもだめだが、固すぎてもだめ。口の中で程よく溶けなければならぬ。

「よそで売れているからといって、同じことをやる気もありません」

商品開発において自分たちの攻めるジャンルを明確に意識している。

「だからうちはパイナップルなのです。おかげさまで五十八年になりますが、これまでご愛顧を頂戴したのは、それだけお客様に愛される商品を作ったということです」
と上田さんは笑った。

◎長く愛される味わい

パインアメの味は、昔から変わらなようなイメージがある。しかし定期的に見直し、どこかしら手を加えているという。

特に味に関しては時代の移り変わりとともに変化させている。甘味料の乏しい時代は甘さを主体にした商品だった。ところが現在のように食生活、ライフスタイルが変わると、甘すぎるのは嫌がられる。そこで甘酸っぱい商品になっているのだとか。

実はフレーバーも変化している。

「少し足りないと感じるくらいがちょうどいいんです」

と上田さん。1個だけでなく、2個目まで手がのびるような商品を目指す。

世の中は諸行無常といわれるが、たとえば海面を流れる氷山の下には永い時間をかけて蓄積された氷の塊がドーンとある。「流行（新商品）“氷山だとすると”定番“は氷の塊。定番商品があつてこそ、流行商品が生み出される。量販店などでも結局一番売れて

いるのは、昔からの定番商品だとさえいわれている。

パインアメは、昔からの味のイメージを保ちつつ、過去にこだわらず、その時代のあるべき姿に形を変えてきた。それが現状につながっている。

「究極的にはお客様が食べておいしいという商品を作るのが私たちの仕事」と上田さん。

◎うちは「飴屋さんです」

「財テクや、遊休地を使って商売することは一切しません」

と上田さんの方針は明確だ。滋賀県に購入した土地の3分の2が空き地になっていることに目をつけた会社から、コンビニやワンルーム・マンションを作って遊休地対策をしてはどうかと提案もあったという。しかし上田さんはそうした話には乗らない。

ワンルーム・マンションが確実にペイできるのは30年後。30年経つたらもう一度やりなおさなければならぬから利益を出せるチャンスはない、と上

田さんは時世を読む。

それに山林で置いてある土地を商業地などにしたら固定資産税が3倍以上に上がる。面積が広い分、税金は高くなる。

「そういう余分なことをするくらいなら、本来の商売でコツコツと稼いで自己資本率を上げることに専念したい。財テクをやって失敗しても誰も責任をとってくれない。ましてやデリバティブなど、もつてのほか。当社は飴やすから、〈飴屋さんです〉でいい。人生、お金を稼ぐことが目的だったら非常にさみしいです」

お金は厳しく稼いできれいに使う、というのが上田さんのモットー。それも使うのであれば世の中のために使う。社内も含め、お世話になっているところへ還元していく。

「人を喜ばし、人様のためになろうとすると、自分たちの生き方の型から脱線したらだめなんです。そこから脱線せずに愚直にやる。当社は今やらなければならぬことがたくさんありますから、無駄なことに時間を費やしている



いずれも際だつ“トガッタ”個性の商品たち

暇はありません。本職に専念します。よそさまより利益が少なくなってもかまいません」

景気悪化の中で ○どのよう 生きていくのか

私たちには納税の義務がある。経済を通して世の中に貢献することができると、そこで国を支えている。

福沢諭吉は「国を支えて国に頼らず」と言った。これが民間で商売をやっているものには必要なことだと上田さんは指摘する。

「国を支えず、国に依存して補助金を待っているのはだめなのです。自助努力でやらねば。企業はスケールではなく、品質

管理、クオリティです。行政や政治がブランドデザインを描けないなら、各企業が自分たちのブランドデザインを作れる人材を教育したらいい。そんな会社が増えることが国を支えるのです」

人づくりがものづくりの基本、面白い商品は面白い人財（人は宝）から出てくるのだという上田さんの経営哲学、変人・愚直でいいんだと肯定されてほつと肩の力が抜けた取材班でした。

今、私 上田豊

●うえた ゆたか 1994年大阪市生まれ。1972年慶応義塾大学経済学部卒業後、(株)東食砂糖部に勤務。1975年パイン(株)に入社。1991年同社代表取締役社長に就任。
趣味「仕事、読書、食べる事、FISHING、COOKING・志の語り合い」
人生の目的「自分作り、もの創り、ひと造り」
人生心得「①利他的心を大切に②明日咲く花のつぼみを大切に③シンプル is best ④上善如水

京町家 再生に思いを込めて



小島 富佐江

特定非営利活動法人 京町家再生研究会
理事・事務局長

百年たっても生きる建物

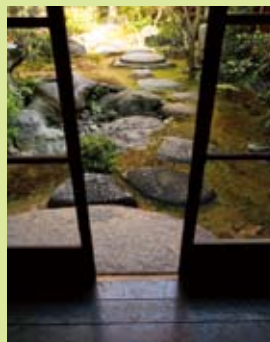
平成四年の発足から、これまで数多くの京町家を調査してきた京町家再生研究会。京町家の保全と再生をめざし、発展的な活動が継続されるなか、協力の輪は遠くニューヨークにまで広がりました。

同研究会の事務局長・小島富佐江さんにお話をうかがい、京町家の建物に宿る歴史、文化、美学が人々の暮らしや心、町のいとなみに何をもたらしてきたか、保存再生の意義を考えます。

■聞き手 辻村 琴美／本誌編集長

■京町家再生研究会 本部・事務局／京都市中京区新町通
錦小路上ル百足屋町384

■2009年4月



庭へのアプローチ、敷石の曲線が優雅

町家をめぐる
「法」への疑問がきっかけ

辻村 町家の保全再生に取り組まれるきっかけは何だったのですか？

小島 特別なことは何もないんです。たまたま自分の住んでいる家が町家で、義父が亡くなり相続等の手続きをとるうちに、私とこのような戦前の木造の建物は、今の建築基準法には全然合わないことがわかりました。京都は特に、こうした古い木造家屋が数多くあります。それが今の法律では守られない、認められないと知って、なんでそんなおかしなことがあるのかなあと、そう思ったのがきっかけです。家を受け継ぐにも、きちっとしていかないことには、もたせられるものももたせられない。そう感じて、京町家再生研究会（再生研）の活動に積極的に関わるようになりました。

辻村 小島さんのご自宅が、再生研の本部になっているんですね。

小島 基本的に事務所としての役割を果たしています。町家の改修、保全再生

についてどうしましょうという相談が寄せられますので、それに対応するのが私の役目です。内容に応じて京町家ネット（※）の中の京町家作事組（※）につないだり、京町家情報センター（※）につないだりと、そういったことをしています。

辻村 まるで町家の縁結びですね。ところで小島さんは以前、滋賀県立大学の曾我直弘学長の京都大学での教授時代に秘書をされていたとお聞きしました。私も数年前に滋賀県立大学の近江環人地域

表屋造りの町家。表屋は京都学園大学の「京町家キャンパス」として提供。祇園祭の準備や、夏を迎えるための建具の入替など、学生さんも手伝ってくれます



再生学座で学んだ際、曾我学長からよく励ましていただきました。気さくであけっぴろげな先生で……(笑)。

小島 そうですね(笑)。私は大学を卒業後、曾我先生の研究室で秘書の仕事をして六年ほどやらせていただきました。

仕事を始めて一年目くらいから、『仕事のやり方は好きなように任せるよ』という感じで、たしか研究室内の經理の仕事も、早くから任せていただいたように覚えていきます。こちらもやる気が旺盛になって、大学での經理や申請書、報告書の書き方や事務手続きなど、いろんなことを学ばせていただきました。

辻村 曾我学長は、プロ根性を引き出すプロかもしれませんね(笑)。

小島 先生のとくをついて、外の世界の沢山の方々と出会わせていただきました。そのお陰で今、どこの場にも出られる自分があるのかなと思います。

(※)……「京町家再生研究会」の発足に次いで、町家の保全、改修を担う「京町家作事組」が生まれ、同時に町家の住み手を中心に、町家の暮らし文化の継承をめざす「京町家友の会」が平成十一年に誕生。平成十四年には、住み手と貸し手の橋渡しをする「京

町家情報センター」が地元不動産業者との協働体として設立され、この四つの組織が有機的に連携しながら「京町家ネット」としての活動を展開しています。

トヨタ財団の研究助成に 採択され町家調査をスタート

辻村 今、町家ブームといわれ、カフェやレストランなど町家店舗が増えていきます。見直しが進んでいるということなのだと思います。小島さんたちは町家を通して、世界のまちづくりとも受発信をしようとしてきたと……。

小島 平成四年に京町家再生研究会が発足して、当初は町家の保全・再生を目的に、とにかくやってみようというので、トヨタ財団に研究助成金の申請を行いました。審査も厳しい、競争率も高いのは聞いていましたが、怖いもの知らずでしたから、調査研究とあわせてイタリアへまちづくりの視察訪問に行きたいということも書いて申請したら、これが通ってしまっただけです。

辻村 それは秘書時代の経験が生きたのかも(笑)。

小島 平成六年から二年続けて、同財団の研究助成に採択され、一年目で京都市内の町家四千軒を調査しました。そして、都市計画や建築を専門にしておられる大学の先生方と一緒に、二年続けてイタリアを訪問し、まずは町家が良いいものであるという証明から始めようとなったんです。イタリアで出会った方々とやりとりをして、調査のためのマニュアルづくりなど、手法を学ぶという点で、おおいに勉強になりました。

辻村 そうした古い建物の保存再生ということでは、イタリアが良い先輩なのですね。

小島 イタリアの古い町並みを訪れて驚いたのは、一軒一軒の内部は大胆な改修をされていて住みやすさの工夫がしてあることです。自分のスタンスさえきっちりしていれば、少々のはかまへんのやと思いました。また、そういう柔軟性が町の人の生き方や町の活気に反映されているのだと感じました。これはこうでないとかかんと言っているだけでは、動くものも動かない、それを実感しましたね。

京町家とニュー Yorker、 新たな協働体制をめざして

辻村 町家調査から始まって、小島さんたちは町家再生のためのプロセスを、きちんと具体化して、ネット化されてきたところに、組織としての厚みや強さを感じます。

小島 初めての町家調査から十年以上が経って、私たちが思っていたことは、だんだんと社会に根づいてきました。ある程度のところまで達したら、また次のステップアップに向けて、もうひとがんばりしなくちゃいけませんよね。でもそのためには、何か大掛かりなものというか、心の中で何かが起こらないと、最初のような高揚感は得にくいんです。正直、私たちはこれまでに十数年やってきたのだし、次の大掛かりなものを仕掛けるのは自分の役割ではないかと思っていたんですが…(笑)。

辻村 世代交代を考えておられたんですね。

小島 あるとき、町家とはまた別の関係で、都市計画の分野でニュー Yorker

とも交流のある大学の先生から、ニュー Yorker でシンポジウムをやってみて、そこで話をして賛同者が得られれば、また面白いことになるんじゃないかと、そういうお話をお聞きしたんです。

辻村 それは何より刺激的ですね。

小島 私はミーハーやから、そんな面白いようなことをされるのなら、喜んでついて行きますという話になって(笑)。

言うだけはタダですから、五億円でも

十億円でも、『がんばって活動します』という言い方をしようと、そう盛り上がっていたんです。そうしたらニュー Yorker で、自然景観や建造物など、保存のための資金を支援するワールド・モニュメント・ファンド(WMF)など、私たちの活動に非常に興味を持ってくださいまして。あれよあれよという間に話が進んで、WMF はじめ NPO や民間の財団等が、シンポジウム



立派な梁。京町家の風格が漂う

開催に協力、参加してくださることに
なっただけです。

辻村 それは快挙ですね。でも、京都
での活動がちょっと停滞気味かなとい
う時期に、輪が広がりますることへの
不安はありませんでしたか？

小島 行く前にはやはり、そんなんよ
それからお金が入ってきたらどうするん
やとか、いろいろ心配してくださいする方
もあつたんです。でも、向こうも良い
と思つたことに資金支援をされるので
すから、私たちは素直に『ありがとう』
って受け入れたらいいのんと違うかな
と思うんです。やってみないとわから
ないことはいっぱいありますし、いろ
んな方にお出会いして、初めて互いに
通じるものがあるのもわかります。一
番大切なのは、直接にお出会いして、
正直に話することかなと思います。

辻村 そういう小島さんの人柄も、向こ
うの方々にとって、印象的だったの
ではないでしょうか。ニューヨークでお
話をされて、手ごたえはどうでしたか。

小島 とてもいい反応でした。たとえ
ばロックフェラー財団の方は、直接に

はお話できなかったのですが、フラン
ク・ロイド・ライトのことをあげられ
まして、『ライト建築は日本の建物にと
ても影響を受けている。日本の建物の
原型は木造建築であり、戦前に建てら
れたような木造建築が消えるというこ
とは、ライト建築の根底が失われるよ
うでもある。それを防ぐためにも、協力
したい』ということをおっしゃって
くださいました。今、W M Fが積極的に
協力を申し出てくださっているんです。
ですから、これから先はこちらがどれ
ぐらいのプレゼンテーションをできる
かだと思えます。それによつてどのよ
うな協力体制が実現するか、その形も
見えてくるでしょうから、この一年は
それに打ち込みたいと思っています。

辻村 ニューヨークが、強い追い風に
なりそうですね(笑)。

小島 以前、ある先生から『外圧を利用
するんだよ』と言われたことがあるん
です。日本人は外国からの評価を気にし
ますから、『そういうもんも守れんで、
日本人は何をやつてるのや』と、言つて
もらえる方がありがたいですね(笑)。

もの見方と考え方を 変えてみる



障子、襖、畳、縁側、自然光をとり入れモダンな建具

辻村 町家の暮らしというのもの、外に向
かって誇るべき文化だと思つたのですが、
私たちは古い家イコール住みにくいと
発想してしまいがちです。日本人は家
に対する意識が低いのでしょうか？



木、石、苔と木造建築が調和して美しい庭

小島 低いというよりも、見方を変え
ることだと思います。住みにくいとい
う我慢も、見方を変えれば楽しみな
ります。それに、そんな我慢をする必要
はなくて、今の技術力があれば、ほと
んど解決できるのではないでしょう
か。

ですから、夏は暑い、冬はさぶい、こ
んな家は駄目やと潰してしまう前に、
もうちょっと待って、環境を改善する
方向で考えてほしいんです。木造建築
の優れた点を本場にわかっているプロ
なら、そういう設計や施工ができます。
家を潰す以外の方法を、今まであまり
考えずにきたことに、大きな問題があ
るのだと思います。

辻村 必要なネットワークが構築され
ているのだから、建て替えだけが方法
じゃありませんね。

小島 今では床板一枚、手に入れるの
が難しいような材料が使っているのに、
それをみずみず潰してしまつて、耐用
年数が25年ほどの建物を建てるのか。
その場所に百年ものあいだ建つていた
ものと変えてしまうのか。そういうも
のの考え方を見直してみたほうが、健全

な暮らしができると思うんです。一度、
潰してしまつたら、二度と建ちません。
潰せるのはいつでも潰せますからね。

辻村 同感です。私も今日、町家がこ
んなにも美しいものかと、改めて感じ
ているんです(笑)。

小島 昔の人たちの「目の確かさ」みた
いなものは、生活の中で養われたと思
うんです。やはり、生まれ育つたこと
ろで、こういうものを見て暮らすかと
いうことは、凄く大事だと思います。

まわりが無機的で殺伐とした環境だつ
たら、何が良いものかという判断基準
を、いつ養うんでしょう。味覚でも視
覚でも何でもやと思うのですけど、本
当やったら子どものときに、身につけ
られるのが一番です。別に大きくて、
広くてというのが絶対条件ではないと
思うんです。小さくても狭くてもいい
し、大切なのは本物を見ているという
ことで、合板ではなく、樟の木を見て
いると、そういう感覚を子どもの時に
もってもらいたいと思います。さわか
たときの手の感覚とか、そういうもの
が大人になったとき、これはちょっと

違うなあとか、比較する材料になるで
しょ。そういうことがなかったら、日
本の文化について、いくら学校で教え
てもらつても、それは知識であつて、
自分の感覚ではないわけですから。感
覚を通じて物事を学び、吸収できるよ
うな、そういう環境を社会の中に置い
ておきたいと思うんです。

辻村 生きている教材ですね。

木造建築が大手を振つて 認められるように

小島 でも、大人がしんどいと思ひなが
ら必死になつてやっていると、その姿
を子どもはみんな見てますから。若い
人が離れるのは、大人の責任でもあり
ます。しんどくても、楽しいことがあれ
ば、子どももそれを受け継ごうと、そ
う思つてくれるのではないでしょう
か。

辻村 自分もちょっと大人に倣つて、
手を出してみようかと。

小島 そういうふうを持つていくのが、
大人の役割だと思います。だから私も、
あまり一生懸命じゃなく、それでいて

積極的に町家の楽しさを伝えていきたいです(笑)。
辻村 では最後に、これからの夢をお聞かせください。

小島 常にいくつか目標を定めているのですが。これまでは町家が何とか残るために、手立ての一つとして相続税の減免ということを言い続けてきました。そしたら、景観法(平成十六年制定)の中で「景観重要建造物」という、これは文化財とはまた違った新しい枠なのですが、これに指定された建造物は、相続税の減免が受けられるという制度が盛り込まれました。十年かかりましたけど、何でもやり続けていたら、形になることがあるんやと実感しました。この次は、私たちの一番大きな目標になっている建築基準法の見直し、これが最大の目標です。日本は戦災を経験していますから、町の中を燃やさないことが最優先になるのは当然だと思っんです。でも、建築基準法ができた昭和二十五年当時と今とでは、技術も格段と進歩しています。防災について多方面から見直していても、もういい

時代ではないでしょうか。

辻村 小島さんたちが言われたほうが、国が動きそうな気がします。

小島 一般市民が言い続けて、実際に動いて、きちんと積み重ねていったもので示すということをやりたいんです。それで本当に法律が変わることがあればとても面白いし。だから、変わった夢だと思われるかもしれませんが、建築基準法が見直されて、木造建築が大手を振って認められるようになること。私はずっとこれをおもうんです。

辻村 それこそ、本当に市民が主役の、新しい社会のあり方ですね。



しなやかに歩み続ける小島さん

いよいよ いよいよ 小島富佐江

●こじま ふさえ 1956年、京都市生まれ。1979年、同志社大学文学部社会学科卒業。結婚を機に中京の町家住人となる。自宅を拠点に「京町家歳時記」を主宰。

●京町家ネット
<http://www.kyomachiya.net/>



■京の町家丁寧な暮らし
小島富佐江著。古くて新しい京都の暮らしを伝える。こちよく生きるためのほんの少しの手間ひまをやさしく伝えてくれる。大和出版。定価1400円+税。



■京町家通信
特定非営利活動法人京町家再生研究会が発行する隔月刊の情報誌。「京町家は今」をテーマに、10周年を迎えた京町家友の会の活動を伝える。

佛門に帰依した青年 今を精一杯生きる



高橋 浄徳

本門佛立宗浄行寺所属教務

私たちの幸せのために 祈る動く微笑む

百年に一度の大不況・・・と、ささやかれてまもなく一年。失業者の増加と就職難の波は収まりそうにない。高校、大学を修了した若き社会人は、この荒波を乗り切れるのだろうか？自分の人生観がもてるのだろうか？大人たちの身勝手なマネーゲームに翻弄されはしないだろうか？親として気にかかる。若者の仕事意識や就職感に変化があるとしたら？そんな疑問が一杯の時、一人の若者に出合った。高橋浄徳君、20才、関西大学の学生。じょうとく(?) そう、彼は僧侶の職を選んだ。なぜ、お寺なのか？彼の選択に迫った。

- 本門佛立宗浄行寺／大阪府高槻市
- 2009年4月



浄行寺は阪急高槻駅に近い

— 出家するいきさつを教えてください。

高橋 僕が大学2年生だった時、お導師が布教活動のためにペルー、ブラジル、アメリカに行かれるとき、一緒に行かないかとお誘いを受けたのがきっかけです。

当時、僕は総合格闘技のプロを目指してたんです。お導師が滞在するお寺の近くに格闘技の道場があることを知り、これはもう行くっきゃないと思い、両親に無理を言って行かしてもらいました。

ある日、サンパウロの街でお導師に「お坊さんになる気はないか？」と尋ねられました。その時は返事待ってもらったのですが、どうしようかなと迷っていました。そんな時、現地のご信者さんの一言が、僕にお坊さんになることを決意させてくれました。それは、ブラジルのお坊さんがお導師と僕のために若いご信者さんと一緒にパーティーを開いてくれたときのことです。ご信者さんの一人が「僕はもっと仏教の勉強がしたい。だけどブラジルでは仏教の事を十分に調べる事が出来ない

から、仏教が根付いている日本に住んでる君が、すぐくうらやましい」と僕に言われたんです。

そう言われたときふっと、僕は日本で何をしていたきたらうかと思ひまして、その時初めて、自分の一生というのを仏教を求め人達のために使うのいいんじゃないかと思つたんです。そうしてみると、僕の親や親戚は昔から熱心な信者で、お寺には昔からお世話になってるので、お坊さんになることが、

子どもたちにも「オコーシ」と親まれる(くんげ会にて)





「ナムミヨウホウレンゲキョウ」堂内に響く

一番家族を喜ばせることが出来るんじゃないかと考える事ができたんです。

そして帰りがけにアメリカでお導師から再度「お坊さんになってみないか」と訊かれた時に、「はい、お坊さんにして頂きます」と答えました。

僕は大学を卒業してからお坊さんになるつもりでいました。というのも、こんなことを言っちゃなんですが、残りの大学生活を目一杯遊ぼうと思ってたんですね、進路が決まってるから。

ですがお導師にそれじゃだめだと、3回生になったときにお寺に入る事が将来、そして親のことを考えると一番良いからと言われました。そうして考えてみると、お寺から大学に行ってきたんと卒業することが今まで親に迷惑をかけた分、いくらか恩返しになるかなと思います、3回生になるときに お寺に入りました。入ってから四ヶ月間は見習い期間なんですけども、それを終えた去年の八月に「淨徳」という名前と袈裟をいただき、正式にお坊さんとなりました。

——ご両親の影響はありますか？

高橋 少なからずは……(苦笑)。実は、高校時代は親のことが嫌いでした。家で揉めているのを見ると、こうはなりたくないなど思ってたんですけど、今は「感謝」ですね。

親も含めて親戚は皆この浄行寺の熱心な信者でして、ぼくは小さい頃からここに連れられて遊んでいたんで、仏教がいつも身近にある環境の中で育てられましたから。

また、お金がないのに私立の高校、私立の大学、それにブラジルまで行かしてくれたってこともありますし。高校の頃、僕はすこし荒れててケンカばかりしていて、そのことで親に心配をかけてたんですね。そのことがあったので、格闘家になっても親は絶対喜んでくれないなど。それなら親が喜んで世のために人のためになる道を生かして追いつめるのもいいかなと思います、お寺に入りました。

——どんな変化がありましたか？

高橋 僕らの宗派はとにかく「南無妙法蓮華經」をお唱えするというもので、そうしながら煩惱を捨てて仏様の智慧をいただく、というものです。

で、拜み終わった後って妙にスッキリして、気持ちが良いくなるんですよ。イライラしてても拜み終わったあとは「何であんな事で怒ってたんやろ?!」っていう位。あれが欲しいなあ、と思

ったときにも買う前に一時間、一生懸命拜みます。すると「何であんなに欲しがってたんやろう」って気持ちに

なつて無駄遣いしなくて済む、でもほんまに必要なものは拜んだ後に「やっぱ買わなあかん」って気持ちが残るんですよ。

ぼくが思うのは、やっぱり人間は煩惱を基にして、他人より得をしたいと思ってる。でも拜んでご本尊と向き合う事で頭をリセットして、良い意味での思考停止みたいなのが起きる。

拜む事を通じて自分の心を自然と良い方向にしていただけのように思ったのが、お寺に入って良かったなと思う一番のことです。

—予感を感じた事はありますか？

高橋 僕は他人と同じ道、っていうのは嫌やっただんですよ。疲れたおっちゃんになるのはイヤやなー、って。そこで何か他人と違う道を歩むにはどうしたらいいのかというのをずっと考え続けてたんですよ。それで最初は格闘家を目指していました。

—若い人たちに一言

高橋 今を大事に生きてほしい、それ

が言いたいんです。人は皆「今、したいこと」とばかりして「今、せなあかんこと」を後回しにする。これはすごく「もつたない」ことだと思います。

「今」というのがあって、その連続が「未来」ですよ。ということは「今」を後悔のないよう、自分にできる精一杯のことをして生きていたら、例え失敗しても後悔しないと思います。

僕たちは変に将来のことばかり考えすぎて思い悩んでしまったり、現実を見ないで変な妄想ばかりしてしまうことがあります。妄想の方が楽しいじゃないですか。でも、現実を見るとおもしろくない。その結果、現実から逃げ、引きこもったりドロップアウトしてしまっているのではないのでしょうか。

「今」を大事に生きるためには「死」というものを見つめることが必要だと思います。この世に生を受け、生きていくということは毎日少しずつ死にむかって歩いていくということです。そして、死はいつどこでやってくるかわからない。そのことを実感した時に「今」を大事にできるのではないのでしょうか。

また、それは親や友人、そして自分本当に大事にすることにつながり、その時に初めて本当の『幸せ』がやってくるような気がします。



淨行寺は子どもたちの集会場のよう

高橋 淨徳

● たかはし じょうとく 1987年生まれ。2005年関西大学社会学部入学。2008年淨行寺で出家。



●対談

西田 芳克 vs 森 建司

(株)山城経営研究所
代表取締役社長

循環型社会システム研究所 代表

〈人づくり「温故知新」—⑥〉

経営道を貫く

感謝の気持ちを忘れず、組織を永続させる経営者の育成

経営に心と道を 正しい経営が正しい社会を生む

大企業のみならず中小企業は試練を迎えている。大量消費社会から次の消費社会へ、エネルギーの分散化、大不況の波、リストラ、社業変換…。今、経営者に求められるものは何か?『経営道』という概念があるようだ。日本古来の慣習や宗教にも似た経営法だ。数字より「心」、経営は心によって創られる。そんな山城経営研究所の西田社長と森代表が出会った。

■ 山城経営研究所／東京都千代田区

■ 2009年4月

経営に“心と道”を求める 「日本経営」という思想

森 山城経営研究所が提唱しておられる「日本経営」というのは、すばらしい思想ですね。こういう経営思想があることを知って、本当にびびくりしています。

西田 日本の従来の経営学というのは、海外から日本に入ってきて広がりを見せたものですが、結局は、欧米を中心に普及している「マネジメント」の翻訳としての経営学なんですね。そこで、故・山城章先生が、「テクニクや効率といった技法面での追求ばかりではなく、日本の文化に根ざした固有の理念をベースにして、経営というものを考えていくべきだ」と言い出され、新しい日本の経営として「日本経営」ということを提唱された。つまり、欧米の科学としてのマネジメントの良いところを吸収・消化しつつ、日本の良いところを残しながら、この二つを両輪にして、“心と道”を求める経営道を実践していくという、実践学としての経営学の考え方なのです。

森 経営リーダーを育成する実践的プログラムとして、「経営道フォーラム」も開講しておられますね。

西田 経営道フォーラムは、日本経営の現代的確立を通じて、次代を担うプロフェッショナルとしての経営リーダーの育成を目指すもので、「KAE原理」を基本にすえて、実践学としての経営学を自立的・自律的・自己啓発的に学びます。KAE原理というのは、これまで学んだ知識（K≡Knowledge）と経験（E≡Experience）を踏まえつつ、絶えざる研鑽によってより高いレベルの実践能力（A≡Ability）を開発・体得していく、自己革新の基本的な考え方です。ただ、経営道フォーラムでは、知識だけでなく見識・胆識を備えた経営リーダーの養成に努めているのですが、六カ月の養成期間では、実体験が必要な胆識まではなかなか難しく、せめて見識を備えるところまではもっていきたいと思って、受講者の学習・研究をサポートしている次第です。

森 経営道フォーラムのような思想運動は、ぜひ全国の中小企業にも広めて

いただきたいと思えますね。

西田 そのためにも、私たち自身もつとめつつ日本の文化・歴史・思想などを勉強し直して、日本の良いところを掘り起こしていかなければいけないと思っています。そういう意味では、まだまだ途上といった感じですね。経営道フォーラムの修了生は、私を含めてすでに二千名以上に及んでいます。私たちとしては、山城先生が言われた「知識をどう実践して、自分の能力を高めるか」ということを常に目標に掲げていますから、修了生は自主組織の「KAE会」に参加し、生涯にわたって相互学習と親睦を深めながら、引き続き精進を積み重ねています。

日本の良さを取り入れた 企業経営は、グローバルな 時代でも普遍性がある

森 日本の良いところを残していく日本経営というのは、例えば「ほどほどにしておく」といった、農耕民族の思想と相通するところがありそうですね。

西田 基本的には、「自然への畏敬の念」でしょうね。生かし生かされているという、日本人が昔から持っている考え方です。

森 相手を倒して、その分を取り上げるというのではなく……。

西田 お互いに生きる道があり、それは、ほどほどにしておくからこそできることだという考え方ですね。こういう考え方は経営の中にも必要だと思いますし、だからこそ、日本の文化というものをもう一度見直してみることが大切になってくるのではないのでしょうか。こういう考え方があってこそ、「世界平和のため」とか「資源を大切にする」といったことにも貢献できるのではないかと思えます。私は、「Win-Win」というのは弱者を作らない、いい考え方だなと思っていますのですが、日本文化の中にはもともと、それとは逆の「Loose-Loose」という考え方があったのではないかと思っています。「三方一両損」といいますか、そういった考え方にみんなが共感を持っていた時代があったのではないかと。みんながお互いに、少し



「自然への畏敬の念と通じる日本型経営」西田社長

ずつ我慢するという考え方ですね。

森 みんなで少しずつ我慢するというのは、大事な考え方だと思いますね。それに、中小企業の場合、儲けないと会社がつぶれるので目先の利益も確かに大事なのですが、一番の願いは、永続ということなんです。何しろ家業に等しいですから、次の代もその次の代もやっていけるといって、そういう願いが強いのです。

西田 今、非常にいい言葉をお聞きしました——永続、と。実は、永続というのは、経営において、今まさに問われていることなのです。私たちはこれまで、企業というの成長すれば永続すると思っていました。ところが、どうもそうではなさそうだとということになってきた。成長しても行き詰まってしまうという感じになってきた。そして、

行き詰まったときに、そこから逃げるのも、どうも難しい。となると、心の問題に戻ってくるような気がするのは、森 そうだと思います。

西田 たまたま、先週も経営道フォーラムの合宿勉強会があつて、そのときも少し話したのですが、ほかの教育機関ではたいてい、「勝てる経営者を育てる」ことを目指しています。いわゆる「WE」できる経営者ということなのですが、「勝てる」ということを、かなり短期的な視野で見ているような気がするのです。それに対して、私たちは、組織を永続させられる経営者を育てることを目指しています。そこが他と違う特徴ではないかと思っています。ことに最近では、日本の文化の良さをうまく汲み取って経営に活かしたら、むしろグローバルな時代でも普遍性があるのではないかと思いはじめているほどです。

効率至上主義が作り出した「できる人間」「できない人間」

森 ところで、うちの会社はバイオに

も関係しているのですが、私は最近、バイオの生命工学や生命科学の場合の「生命」と、人の「命」というのは、どうも違うのではないかと思うようになっていました。生命科学の生命は、命とは違って、あくまでも対象物という物体であり、例えば心臓が止まったかどうか問題だったりします。ところが、命のほうは、自分の命ですから、死んだらどうなるかという話になり、これももう、まったく別問題なわけですよ。

西田 そのお話は、山城先生が「経営学」というのを、経済学の一部から独立させるべきだ」と言われていたのと非常によく似ている気がします。要するに、自然科学であれば、客体と主体を完全に分けて、主観が入らない格好で原則を見つけていくという方法を取らざるを得ない。しかし、経営学は、研究している自分自身が関わる問題ですから、分けることができない。その辺が、日本経営ということを提唱するきっかけでもあったようです。結局、経営学というのは実践学であり、実践してナンボのものですよね。ただ単に研

究対象にしても仕方ない。学んだことは実践しないといけないし、実践しつつ学ぶことによって、さらにまた自分を成長させることができるのです。**森** それで、これはぜひ一度検討してみていただきたいのですが、中小企業向けの経営学の本というのが、まだないんですね。私たちのような中小企業が経営コンサルタントから教えてもらうのは、ほとんどが大企業向けの経営学です。ですから、なかなかその通りにならない。で、「うまくいかないじゃないか」と言ったら、「お前のところの努力が足らんからや」と(笑)。しかし、中小企業が効率優先で管理面ばかり充実させても、実際にモノが売れないと、社員だってついてこないですよ。今の大企業向けの経営学では、そういう問題ばかり起こるんですね。



「永続するのが企業の役目」
森代表

西田 確かに、効率一辺倒でいくと、効率的でない要素は全部切り落としてしまえということになって、問題が起きるでしょうね。しかも、その過程で、「できる人間」と「できない人間」という問題も出てきます。でも、できない人間というのは、逆に効率至上主義が作り出したという側面もあるのです。よく、「二・六・二の法則」ということが言われ、確かに経験的にいっても、そんな感じがします。二割の人間が、黙っていてもどんどん働き、六割の層がそれに追随し、最後の二割は「どうでもいいや」と(笑)。でも、じゃあ、会社をよくするために、その二割の人間を切ってしまう方がいいのかというと、私は決してそうは思いません。最後の二割の層には価値がないと思うから「切れ」という話になるのでしょけれど、ひよっとすると真ん中の六割の層というのは、その下に二割の層がいるから頑張れているのかもしれないのです。ですから、一番下の二割の層は、そこにいること自体に価値があるとも考えられるわけなのです。

専門化ではなく多職能化で 人間の良さを発揮させる

森 それと、これは教育の問題でも最近よく言われることですが、例えば理数系が得意ないとダメと決めつけるようなやり方もよくないですよ。もっと本人の適性に合った方向を探す意欲をもたせるようにしないと。

西田 私もそう思います。しかも今は、格差社会ということで、すぐに強者と弱者みたいな話になってしまっていますから。

森 弱者と言われる人たちでも、働いて能力を伸ばせるようなことを考えていけないといけないと思いますね。

西田 そうなのです。だから、いろいろ考えればいいんです。相対的な格差があるのは仕方ないことだから、私は一概に格差社会が悪いとも思っていない。格差社会に問題があるとすれば、それは「対流が起らない仕組み」だと思います。人間の評価が固定化してしまふことですね。これが一番まずい。分野によって得意不得意があつて当然で

すし、人には誰でも、自分のやっていることにほかの人がついてくるといふ、そういう得意分野が必ずあるはずなのです。例えば野球の得意な人は、どんなその分野でみんなを引つ張っていいのであつて、その人が必ずしも数学が得意である必要はないわけです。それを、何か一元的な経済的な評価の段階だけで、ダメな人間として固定化してしまつところに、格差社会の問題の本質があるような気がします。

森 都会のサラリーマン社会に対応できない人でも、「オレは体が丈夫だから、力仕事は任せてくれ」といった感じで、そういう分野の働き口を見つけていけばいいわけですね。あるいは、田舎に帰つて、そういう仕事を探すとか。さらには、そういう受け入れ体制を作つて、地方のまちおこしにつなげていくとか。

西田 いいですねえ。そういう、新しい仕事をいろいろ作つていく感じは、企業の場合もまったく同じことが言えると思います。リストラとかビジネスプロセス・リエンジニアリングといったことに関わつてきて、つくづく思うので

すが、人間の能力という点から言えば、そろそろ「専門化」から「多能化」ないしは「多職能化」という方向に変えていかなないと、一人ひとりの本当の良さを発揮できなくなるのではないのでしょうか。ですから、私たちのプログラムもそういう方向で進めていますし、その中の一つに、ビジネスプロデューサー養成講座というのがあります。このプログラムでは、知財をいかに作り出していくかということを勉強しており、フィールドアライアンスという考え方を明確に打ち出しています。自分の視点だけで見ていたら、行き詰まつたり、「これはとても商品にならない」と思えたりすることでも、関連する業種の人たちの視点を合わせて多角的に見てみると、「商品化できる」ということが見えてきて、みんなにも納得してもらえることが、確かにあるんですね。

経営というのは根本的には 「矛盾の調和」の実現

森 多角的に見るといふことでは、先



多種多様、十人十色を包含できる企業経営を

ほど生命と命の話が出てきましたけど、人間は生き物ですから、死生観から離れては生きられないと思うんですね。それで、関西には宗教も教えている大学が結構あるので、経営学と宗教学の間で交流が行われていないかと思って、一度聞いたことがあるんです。ところが、経営学のほうでは、むしろそういう関わりを排除しているみたいで、「専門が違うから、話をする機会はない」とのことでした。

西田 その話を伺って、ふと思ひ出

したことがあるのですが、たまたま、経営道フォーラムの合宿研究会で新しいコミュニケーションのあり方を研究しているチームがあつて、いろいろな文献にあたってみても、どうしても行き詰まってしまうので、もっと宗教の勉強をしたほうがいいのかもしれないと感じはじめたというのです。やはり宗教には、そういう何か論理とは違った、心の通わせ方みたいなものがあるように思います。生き方にうまく折り合いをつけてくれる良さと言いますか。

森 そうですね。例えば比叡山に延暦寺という有名なお寺がありますけど、そこでは昔から「お返ししなさい」ということが言われています。つまり、「人はなぜ働くのか」という話になったとき、「それはお返ししなさい」と。自分はずべてのものに生かされているから、その「生かされていること」へのお返しなのだ。これもやはり、非常に宗教的な問題だと思えますし、それがそのまま企業活動にも当てはまるとは思いませんけど、「お返ししなさい」と働くというのは、説得力がありますよね。

■ いいお話ですね。おかげさまでというのは、規模の大小を問わず企業にも必要な心ではないでしょうか。そういう考え方があってはじめて、これから企業活動を続けていくうえでも、うまく折り合いをつけることができるような気がします。自分も幸せ、会社も幸せ、お客さんも幸せ、そして社会も幸せ、というような話に持つていける可能性があると思うのです。

森 近江商人の「三方良し」は、まさにその考え方ですね。資本主義自由経済から見ると、一種の矛盾かもしれませんが。■ 根本的に、経営というのは「矛盾の調和」なのです。ですから私は、管理者が集まってもらったとき、よくこういう話をします。「会社が矛盾している」と部下の前で言っているかもしれないですが、会社が矛盾しているのは当たり前なのです。皆さんは、矛盾を調和するために月給をもらっているのですから。矛盾をどう解釈すれば、みんながハッピーになる表現ができるか、それを考えないといけないのではないですか。それを考える際にも、お返し的心とか、お

かげさまでといった感謝の気持ちは、非常に重要になってくるような気がします。森 西田社長と私は同世代ですが、私たちが若いころは、親孝行とか、苦勞してきたお袋を楽にさせたいとか、そういうことを思っで働くというのが、ある意味、当たり前でした。感謝の心で働かせてもらうということが。

■ 結局、今そういう感謝の心がだんだん消えていっているところに、問題があるような気がしてなりません。私たちの豊かな生活は積み重ねの上に成り立っているのだという、祖先に対する感謝の気持ちというものを、もう少し根付かせないといけないと思いますね。

むしろ中小企業のほうが実践しやすい日本経営の思想

森 企業、ことに中小企業は、これから厳しい時代を生き抜いていかなないといけないわけですが、企業のあり方や将来については、どのようにお考えですか。■ 企業のあり方としては、今は、何に目的を置くかということが見直され

ている時期だと思えますね。これまでは、「会社が成長すれば、みんなを幸せにできる」と思っでやってきました。ところが、必ずしも会社が大きくなったからといって、みんなが幸せになるとは限らない。お金がたくさん残ったからといって、みんなが幸せになるとも限らない。そういうことがわかってきたんですね。となると、必ずしも収入が高ければいいというものでもないし、大企業でないと幸せが得られないわけでもないという、考え方が出てきて不思議はないと思うのです。

森 経営道フォーラムに参加される方々は、そのような観点からの経営思想を学ばれて、経営に活かされるわけですね。そういう経営思想を持つと、過去の経営学はいったん横に置いて、まったく違った角度から経営戦略を立て直すことができそうです。

■ 学んだことを即、会社に戻って適用できるかといえは、なかなかそうはいかないときもあります。でも、そうした中でも、どうすれば矛盾を調和しながら理想の実現にもつていけるかを考える

だけでも、本当に違ってくると思います。森 そうすれば、いつかは会社も変わるよ。

西田 変わります。現に、経営道フォーラムでは大企業のリーダーの方に講演をお願いしていますけど、お話を伺っていて、日本経営の考え方がかなり行き渡ってきているのではないかと思います。

森 どうか、中小企業も見捨てないでいただきたい(笑)。

西田 実は、こういう思想を一番的確に実行できるのは、むしろ中小企業の皆様なのです。というのも、オーナーとして経営に携わっている人が多いですから、すぐに自分の会社に反映できるんですね。

森 私どもも、田舎でささやかながらも日本経営の経営思想を実践していきたいと思っていますので、どうか今後とも、いろいろお力添えをいただければと思っています。

西田 むしろ、こちらこそいろ

いろ教えていただきたいと思っくらいで。循環型社会の構築に向けた、今までにない取り組みを、実際にやらな取り組みを、実際にやられていて、感謝を受けています。

森 本日はありがとうございました。



経営のエキスパートたち(写真は故・山城章先生)



●KAE情報
山城経営研究所が発行する公開研究会の講演録や出版物の数々。

心と道 西田芳克

●にしだ よしかつ 1939年生まれ。北海道出身。慶應義塾大学経済学部卒業。1963年、日本アイ・ピー・エム(株)入社。1995年、同社常務取締役西日本支社長。1999年(株)ベルス代表取締役(株)山城経営研究所入所。同年10月、同研究所代表取締役社長に就任、現在に至る。「経営道フォーラム」第2期生。日本経営教育学会理事、経済同友会・同友クラブ理事。

関ヶ原合戦の武将達

佐々木 洋一



音に聞こえた天下分け目の関ヶ原合戦場を紹介してみよう。

とりあえず、関ヶ原に近い関ヶ原歴史民族資料館を訪れてみたい。

まず目に飛び込むのが壁面の巨大なパノラマだ。

東軍、西軍の布陣が一目で分かる。

手元のスイッチを押せば、各陣ごとの豆ランプが点灯して、戦局の推移を音声で解説してくれる。

当時の甲冑や武器をはじめ、資料も展示されていて興味は尽きない。

次に向かったのは、石田三成の陣跡、ここは小高い丘になっており、東西両軍が布陣したとされる光景が眼下に広がる。

ここでもパノラマ図が設置されていて、音声でガイドしてくれる。

突然だが、ここでクイズ！

① 赤備えで有名な○○○四天王のひとつ、○○○政

② 石田三成とは、秀吉公の近習時代からの盟友、この合戦を死に場所と白装束での出陣、○○○吉継



一峰味佐

● ささき よういち 119
40年、7月生まれ。長浜
市在住。グラフィックデザ
イン、画家

- ③ 賤ヶ岳七本槍のひとり、
○○○正〇
- ④ 同じく七本槍のひとり、○○嘉明
⑤ 三献のお茶で有名、亡き秀吉の恩
義を忘れなかった○○三〇
- ⑥ 家康の四天王のひとり、「家康に
過ぎたるものがふたつあり唐の兜
に○○平八」と詠われた○○多〇勝
⑦ ノーヒント、「鳴かぬなら鳴くま
で待とう…」、○○○○
- ⑧ 文化人で芸能にも秀でた細○○興
⑨ 毛利家の家臣、西軍に属しながらも
彼が必死で止め、戦いに参加させ
なかった。吉〇広〇
- ⑩ 父親譲りの智謀家、黒〇〇政
あなたはこのうち、幾つ答えらた
かな？

〈MOH-ECOTOURISM-11〉

上高地の確かな役割

檀上 俊雄



雨上がりの河童橋。絵はがきの日本ばなれたアルプスの姿もいいが、水源の森上高地には霧が舞う風景がよく似合う。高機能なゴアテックスの雨具を身に纏えば、雨の日もまた楽しい。

昨年の夏は山登りで、上高地に4回足を踏み入れた。釜トンネルを抜け、焼岳の噴煙を見上げながら上高地バスターミナルへ、沢渡または平湯からエコ対応のシャトルバスで行く。その近くの河童橋はいつも、驚くほど多くの人で溢れていた。だれも混雑をものともせず、記念写真を撮ったり、梓川の清流や穂高岳の高い連なりを指差しながら、素晴らしい風景との出会いを楽しんでいる。

こうした中であつても、訪れる多くの人にとって上高地の印象はとても良いようだ。国立公園としての官民あげての管理が他より徹底していることや、山と渓谷のスケールの大きさが抜きん出ているからだろう。河岸をケシヨウヤナギが覆い、牛の放牧場跡に植えられたカラマツは大きく育ち、そのまわりをトウヒなどの針葉樹が深い森となつて広がる風景は、自然保護の長い歴史の大きな成果といえるものだ。

夏の終わりには河童橋に近い小梨平キャンプ場にツキノワグマが出たというニュースが流れた。上高地にある歩道はどこもひっきりなしに人が通っている状態であり、そうしたなかで大型動物が今も身近にいることを私たちに教えてくれる。歩道の両脇には広大な森林地帯が広がっていることで、かうじて棲息を可能にしているのだろう。上高地は、梓川の下流から大正池、河童橋周辺、明神、徳沢、横尾と続き、その先で谷が涸沢と槍沢方面に分かれる。観光客といえども今では河童橋や大正池だけではなく、右岸の自然探勝

路を上流へ進み、明神橋を渡り左岸の登山道をひとまわりする人が多い。明神は古道徳本峠から降り立った地点にあたり、右岸に聳える明神岳の山裾に明神池があり、この池畔には穂高神社奥宮が鎮座する。下流からではなく峠越えで入るのが一般的であった時代には、明神は上高地の中心であった。

大正池から横尾までの梓川には、下流から作業道の橋、田代橋、河童橋、明神橋、新村橋、横尾橋の6つの橋が架かる。河岸の深い森から抜け出て橋を渡る時に、雄大な山や川、森の風景が展開する。槍穂高連峰が右岸となるが、左岸にも霞沢岳、蝶ヶ岳、常念岳、大天井岳が峰を連ねる。山が高ければそれに比例して、作られる地形も規模が大きい。梓川は、日本を代表する大河のひとつである信濃川の源流にあたる。上高地は、日本を代表する大自然境のひとつとして、またヨーロッパアルプスに匹敵する山岳景観を持つ山岳観光地として、抜きん出た存在でありつづけてきた。流れ出る清冽な梓川の流れと谷底を埋める深い森は、あるべき

水源の姿とはこういうものだという確かなイメージを、訪れた人に強く抱かせる。さらに3000メートルの植物の垂直分布の、季節ごとに変わる姿は劇的といえるほどであり、日本の山の自然の季節感に富んだ素晴らしさを教えてくれる。

かつての客層と違う様々な観光客の増加は、自然と遠い位置にいた人々も環境の時代とともに自然の最後の砦といふべき山岳地帯に関心を持つようになったことを意味する。そして上高地や明神から徳沢や横尾へ、さらに涸沢から奥穂高岳までというように、訪れるたびに足を延ばしてゆくリピーターが多いことは注目すべきだ。

河童橋下の河原で美しい梓川の流れに手を浸してみても、その雪解け水のあまりの冷たさに驚く。岳沢の残雪が消えても、奥の涸沢や槍沢の源頭には数年に一度しか融けない越年性残雪が少なからずある。2万年前には多くのカールには水河が懸かり、さらにその数万年前には下流の横尾谷まで延々と水河が流れ下っていたということも明らか

かになっている。ヨーロッパアルプスの現状とまさに同じ状況であったことになる。現代に至る第四紀だけでも、氷河時代は少なくとも4回はあり、そしてそれぞれの間氷期には、今世紀末に予想される以上に変動が大きかったことも知られている。

槍ヶ岳や穂高岳をめざす登山者にとっては、平地でいえばシベリアと同じ気候である高山帯へ向うのであるから、その魅力は計りしれないほど大きい。さらに登山者は最先端技術で作られた装備服装を身に付けて、エコ対応の進んだ設備の良い山小屋を利用する。目も眩むような岩稜の道を登りながら、二日三日のいたってシンプルな環境生活を送り、危機管理のトレーニングをすることに。こうした体験はどこでもできることではなく、環境先進地上高地と槍穂高連峰の持つ大きな効用といえるだろう。

上高地や槍穂高連峰は、地図を見れば私たちの住む琵琶湖集水域と脊梁山脈でひとつながりであることがわかる。日本アルプス造山運動と琵琶湖の造湖

運動は連動する地殻変動である。さらにヒマラヤからのジェット気流の支配下にあるダイナミックな気候が大量の雪や雨を降らせ、類い稀な植物の垂直分布や生態系を作る。琵琶湖は富士山とその容積が似ていることからよく対比されてきたが、それ以上に上高地と槍穂高連峰は身近な存在といえるかもしれない。湖底に堆積する地層と山の斜面の地形や生態系という違いはあっても、共に激動の自然史を記録する役割を担っているからだ。



管理が徹底する国立公園内では、穏やかに自然を愛でることができるような気持ちにさせられるが、ここは実は年齢に関係なく自らの向上心や危機管理能力を高め続ける人へのみ許された世界であり、うかうかしていると自らの存在などあつという間に自然にのみ込まれかねない、美しくも厳しい大自然フロンティアである。

環境の時代にあつて必要なことは、人任せにせず自ら足を運び、これまでに起こった自然の営みの最大値を知る

登山は、大自然の素顔を知る貴重な手段である。観光の人にも再訪するまでに体力づくりと登山の基本技術を習得し、森林限界を超え高山帯の奥穂高岳山頂が間近に望める標高2300メートルの涸沢カールまで足をのびたいものだ。北穂高岳を望む、途中の横尾谷のU字谷からして、私たちの想像を超える最大氷河期の貴重な自然遺産である。現代に生きる私たちに迫り来る温暖化だが、これまでの自然変動やその規模を知っておくことは欠かせない。

ことであり、これによって私たちは温暖化に伴う様々な変動の程度を客観的に把握でき、的確に対応する道が開けるだろう。この山岳地帯は湖底より容易に、そうした自然のダイナミズムを知ることができ

る。マイカー規制で入山者を抑えてきたが、それも限界に近く、訪れる際は入山の少ない平日にしたい。

檀上俊雄

● だんじょう としお 1951年広島

県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員。

著書／「比良山・湖西の山」山と溪谷社（共著）

ふれあい

第14回

『一日一生』

中井 二三雄



「一日一生」。長年の座右の銘である。今日一日が自分の一生の最後の日だと思い大切に生きる、というこの言葉が真実味をもって迫ってきた。最近、肝臓がんだと宣告されたからである。抗がん剤治療を続けたいと余命六箇月（治療が功を奏しても数年？）だ

という。

まだまだ先のことだと夕力をくくっているからか、あれほど怖かった死への恐怖はない。

また、まだ生きてるといふ生の喜びにより、世の中の総てが光り輝いて見えることもない。もちろん、家族への感謝の念は以前にも増して湧くが、さしあたって毎日の言動や人生観に大きな変化は見られないのである。

ただ、思う（心がけている）ことは、

人生の整理（暮引き）をいかに効率的にするか。生を得て六十年（余談だが、還暦の年男なのに残念至極……）。この間に築いた人間関係、集めた資料をどのように早く整理整頓するか、これが問題だ。いつか使おうと思っていた資料も惜しみなく捨てる、今さら枝葉末節にはこだわらない、いつ死んでもいいように私らしいメッセージを残しておく。さしあたり出来ることはこれくらいか。——とまれ「明鏡止水」で

今を精一杯生きたい。

余談だが「あなたは優先順位を間違えてる。整理よりも、生きることが先決」と忠告してくれる、癌先輩“もいるにはいるが……”。

中井 二三雄

●なかい ふみお 1949年、守山市生まれ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、著述業。滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

癒しの森林へようこそ!!

作 松 正 樹

みなさんは、「森林セラピー」という言葉を聞いたことがありますか？



木林林を歩くと癒される。その癒しのことです。



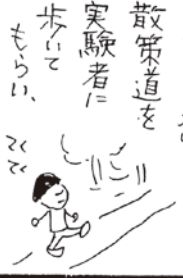
でも、「癒される」って本当なの？



そこで「癒し効果」を立証する実験が行われた。



「くつきの森」の散策道を実験者にもらい、



だ液を採取し、

成分を測ったり、



アンケートに答えてもらったり。



同じ人に、街を歩いてもらい、



同じようにだ液をとったり、

アンケートに答えてもらったり。



このような実験を

「森林総合研究所」という専門家に行ってもらった結果……

……

高島市の木林林は癒し効果があると判断され、



「森林セラピー基地」の認定をうけたのだ!!

そして今、「セラピーロード」として宣伝しているコースは

「くつきの森」にイコース。



「県立朽木 いきものふれあいの里」内に2コース。 高島の森林は人の心を癒すという。 アピールを していくのだ!

いづれば、今津ヤマキノ など、 あちこちに「セラピーロード」をつくり、

アピールイベントのひとつとして行われたのは2月18日開催された「心と体の癒し体験」。

講師は、飯高さんご夫妻。 転石さん ↓ 真里奈さん

午前中は2班にわかれ1班は 転石さんと 全禅体験

呼吸をゆっくり大きく行うことで体内に新鮮な空気を送りこむ。 自分に向きあう時間でもある。

2班は、真里奈さんと ヨガ体験。

並段使われない筋肉をのぼしたりまげたり。

汗をかきほじり動く 健康ヨガ。

心や体を使ったあとは料理教室。

けんちゃん汁を みんなで作りました。

ごぼう、大根、人参、里芋、とうふ、きぬさや、油あげ

のり、具だくさんの汁

その他、真里奈さんのお手製のピカタ。

黒ゴマ豆腐 ↓ 赤かぶのつけもの ↑ はっさくと春菊のごま和え



くつきの森 セラピーロード 案内マップ

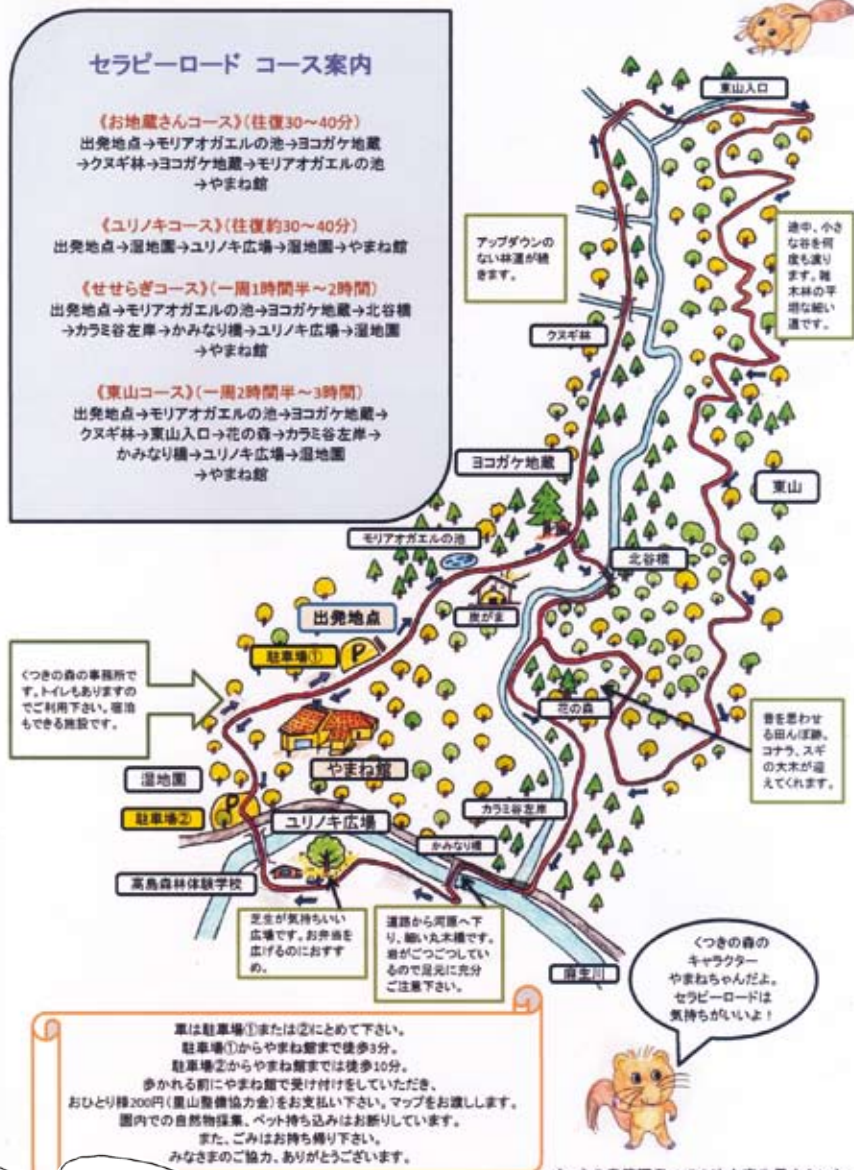
セラピーロード コース案内

【お地藏さんコース】(往復30~40分)
 出発地点→モリアオガエルの池→ヨコガケ地蔵
 →クスギ林→ヨコガケ地蔵→モリアオガエルの池
 →やまね館

【ユリノキコース】(往復約30~40分)
 出発地点→湿地園→ユリノキ広場→湿地園→やまね館

【せせらぎコース】(一周1時間半~2時間)
 出発地点→モリアオガエルの池→ヨコガケ地蔵→北谷橋
 →カウミ谷左岸→かみなり橋→ユリノキ広場→湿地園
 →やまね館

【東山コース】(一周2時間半~3時間)
 出発地点→モリアオガエルの池→ヨコガケ地蔵→
 クスギ林→東山入口→花の森→カウミ谷左岸→
 かみなり橋→ユリノキ広場→湿地園
 →やまね館



くつきの森の事務所です。トイレもありますのでご利用下さい。宿泊もできる施設です。

アップダウンのない林道が続きます。

途中、小さな谷を何度も渡ります。雑木林の平坦な絶い道です。

昔を思わせる田んぼ跡。コナラ、スギの太木が遺っています。

芝生が気持ちいい広場です。お弁当を広げるのに最適です。

道路から河原へ下り、眺めは素晴らしいです。道がごつごつしているため足元に充分ご注意ください。

車は駐車場①または②にとめて下さい。
 駐車場①からやまね館まで徒歩3分。
 駐車場②からやまね館までは徒歩10分。
 歩かれる前にやまね館で受け付けをしていただき、おひとり様200円(里山整備協力金)をお支払い下さい。マップをお渡しします。
 園内での自然物採集、ペット持ち込みはお断りしています。
 また、ごみはお持ち帰り下さい。
 みなさまのご協力、ありがとうございます。



くつきの森のセラピーロードの紹介です。歩きに来てね!

●オノ ミユキ (本名 加藤 みゆき) = 1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村 (現高島市) に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は2人の子どもを子育て中。

くつきの森管理者:NPO法人麻生里山センター

花びら

畑 裕子



イラスト:徳永 拓美

若葉の季節になると春愁の想いにとらわれたものだが、いつの頃からか、初々しい緑や花々は生きる喜びに変わってきた。とりわけ最近、ささやかな庭の樹木に春の気配を感じただけで

気持ちが豊かになってくる。鏡山の麓に家があるためか、鳥たちも入れ替わり姿を見せる。転居してまもない時、カラスの鳴き声を小学生になったばかりの息子の声と間違えてしまったことがある。「おかえりなさい」と声をかけても当人はなかなか姿を現さない。不審に思い外に出てみると門扉の近くにカラスがちよこんとしてこちらを見ていたのだった。

今年も白木蓮の花びらがひらひらと風に揺れている。我家の木蓮はコブシに接木したのだから太ふりのコブシのような花を咲かせる。やわわとした白い花はどれもヒヨドリを惹きつけるらしい。ふと窓辺を見る

と黒っぽい姿が花をついばんでいる。はじめのうちは白と黒のコントラストが美しく、眺めていたのだったが、そのうち、心配になってきた。木蓮の花の命は短い。ヒヨドリに大切な花が食い尽くされるのではないか。一羽だけでは、二羽、三羽とやってくる。ガラス戸をトントン叩くだけでは飛び立たない。ついに私は庭に出て「ヒヨドリさん、もうそのくらいにしておくれ」と声を上げた。ようやく彼らは立ち去った。

庭には彼らの食べ散らした残骸が散っている。その一片を拾い、庭で伸びをしている犬の口を持っていく。食いしん坊の犬は臭いを嗅いでいたが、食べなかった。「おいしくないの」と言いながら、私は樹上の花びらを取り、口にしてみた。確かにしっとりしているが無味と言ってよい。こんなものを食べるとは、山に餌が少なくなってきたのだろっか。

木蓮の近くにグミの木が植えてある。亡父が故郷から持参した私にとって形

見の木である。そのグミはヒヨドリの好物で、ほんのり色づいた頃から毎年、彼らの餌食となっている。葉陰に残ったルビーのようなグミの実を見出した時の私の喜び。心の中でさまざまみろ、と歓迎されない鳥に悪態をつく。

花盛りとなったグミの花の付け根が心もち膨らみ、豊作を予感させる。臉に鈴なりとなった赤い実を思い浮かべながらも、私は悲観的になる。今年も鈴なりのルビーを見ることは不可能だろうと。それならいっせヒヨドリを撃退してはどうか。それも無理だ。四六時中見張っていることなどできない。

あれこれ思っているうちに、私は自分の中に思いもなかった欲の皮が突っ張っていることに気づいた。常々人からも言われ、自分でも欲の少ない人間であると思っていた。その自分が鳥にワークシェアリングすることを拒もうとしているのだ。やめた、やめた、心の中でそうつぶやき、『徒然草』の中の一文を思い浮かべた。作者吉田兼好に笑われるのが落ちてゐる。

『徒然草』第十一段、「神無月のころ」で兼好は記している。ある山里に人を訪ねて分け入った時のことである。庵の住まいに感心していた兼好は、庭の向こうに大きなみかんの木がたわわになって見えるのを見た。ところがその木の周囲が嚴重に囲ってあったのだ。興ざめた兼好は、「この木がなかつたら」と思ったのである。理想的な草庵の暮らしをする者も物欲から逃れられないものなのだろうか。高校生だった私の心に深く印象つけられた内容だった。

古典というものは妙なところで顔を覗かせてくれる。人間だけでなく生きとし生けるものが、互いに共存していくためには分かちあうことの大切さが必要となってくる。が、そうした精神は聖域と呼ぶにふさわしいもののような気がしてきた。

欲深い私はあらためてヒヨドリのことを思った。我が家の小さな庭に、この嫌われ鳥はどれほど植物を運んできてくれただろうか。南天、枇杷の木、万両……と。そして我が家のグミもまた、

どこかへ運ばれ、息づいているに違いない。

畑裕子

●はた ゆうこ 1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年・第5回朝日新人文学賞受賞、1994年・第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。

徳永拓美

●とくなが ひろみ 1949年生まれ。日本画を学ぶ。日春展、京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさかろう」(京都新聞社)、「守山の野鳥ガイドブック」(守山市立教育研究所)、「甲賀のむかし話」(サンライズ出版)、「イルカをおそった黒い波」(汐文社)など。レイカディア大学「手作り紙芝居講座」講師。

自分づくりに挑戦しよう

その一

井上 昌幸



今回は、いろいろな資料を参考にしながら、「自分づくり」について考えてみたいと思います。

中国古典の「論語」の中に、孔子の言葉として、「述べてつくらず、信じて古を好む」（私は先賢の道を伝えるだけで、私の説を立てるのではない。先賢の道を信じて愛するのである。）とあります。聖人と言われる孔子さんが、自分が話していることは自分の考えではなく、先賢の言葉を通して話しているのだ、と言われているのです。

私がこれから説明する内容も、自分の意見と言うよりも先人の述べてこられたことを伝えることになります。

また、「論語」の中に、「命を知らざれば、以って君子たること無きなり」（天から与えられた使命を知らないようでは、立派な人間とは言えない。）とあります。

安岡正篤先生は著書「知命と立命」の中で、「自分がどういう素質や能力を天から与えられておるか、それを称して『命』という。知ってそれを完全に發揮してゆく、即ち自分を尽くすのが立命である。」と述べておられます。

私たちは日本人として生まれ、いまここに生きています。そして私たちには両親があり、先祖があります。十世代前に遡れば千人、更に二十世代前に遡れば百万人の先祖があるわけです。ある実験によりますと、五千匹前の鼠、つまり十二世代前の鼠とその血筋を継承している今の鼠の遺伝子には多くの共通点があるそうです。

私たちは数千年前からの先祖の遺伝子を受け継いでいることを知っておく必要があります。そして日常思っていること

や話していることは顕在意識と言われ、それは氷山の一角で、私たちの心の中には表には現れない潜在意識が約八割を占めているのです。つまり先祖から受け継いできた日本人の魂が脈々と息づいているのです。

本居宣長は「しきしまのやまと心をひと問はば 朝日に匂ふ山桜花」と自然と人間の一体感を詠んでおり、山上憶良は万葉集で「憶良らは今はまからむ 子哭くらむ そのかの母もわを待つらむぞ」と家族愛を詠んでいます。

私たち日本人は昔から自然との共生と家族や村人との共生を大切にす大和の心を育んできました。

第二次大戦後六十四年が経ちました。そして先人たちの必死の努力により、国全体が見事に復興して、物は豊かになり、世界第二位の経済大国となり、ほしい物は何でも手に入るような生活をしています。東南アジアの人たちは日本の豊かさに憧れを持っています。

しかしながら、今の日本人は戦後の学校教育や家庭教育の歪みから自由主義や個人主義が横行して、自然との共生や家族や社会との共生を大切にす大和の心を失いつつあります。

長い日本の歴史からみれば、六十年は一過渡期に過ぎませんが、本来の日本人の大和の心を取り戻すためには、具体的な活動が必要です。時間がかかっても自らを変えていかなければなりません。

これから城野宏先生著「脳力開発」の内容を説明します。

私たちは百四十億個の脳細胞を持っているといわれ、生涯に使われるのはせいぜい十パーセント程度であるといわれて

います。ですから年齢に関係なく脳細胞を活用することが出来るのです。脳細胞即ち神経細胞には何十という「突起」(シナプス)が出ており、行動することによりこのシナプス同士がつながると網となり「神経網」ができあがるわけです。

例えば自動車の運転を考えますと、最初は前進、後退、車庫入れなど思うように出来ません。繰り返し、繰り返し練習することにより、少しずつ運転が出来るようになります。取得した後は何の苦もなく運転が出来るようになります。これは同じことを繰り返しすることにより、シナプス同士の結び付きが強固となり、完全な「神経網」ができあがるからです。

このことはスポーツ、勉強、芸術、技術などあらゆる面で具体的な行動を繰り返し、習慣化することにより、上達することを意味しています。

私たちは「楽しみの人生」か「嘆きの人生」かどちらを選択するかといえば、「楽しみの人生」を選ぶと思います。

その「楽しみの人生」とは、「心身ともに健康な私、明るい家庭そして働き甲斐のある仕事を持つこと」だと思います。この三つのことを自分自身で振り返ってみて、すべてに満足している人はここからは読む必要がありません。

何をやるにしても「心の充実」つまり精神的姿勢をプラス思考で行動することが大切です。まず、

一、「自分で主体的にやる姿勢」を持つ

・その反対が「人頼りの姿勢」愚痴を言う、悪口を言う、人のせいにする、人を恨む、人をねたむ)です。

・何かうまくゆかない原因は相手や環境にあるのではなく自分にあることに気づき、今足りない条件をつくり出すことです。まず自分が変われ。

二: 「進歩発展をめざす姿勢」を持つ

・その反対が「現状に甘んずる姿勢」(難しいという意識、失敗のおそれ、評価のおそれ、見栄っ張り)です。

・言葉はイメージをつくり、イメージは脳回路(手・足・口)を支配します。

・難しい、困った、参った、もうだめだ、など消極的な言葉を使わない。

・できることからやれ、やさしいことからやれ

三: 「他人の利益もはかる姿勢」を持つ

・その反対が「自分だけよしの姿勢」(相手の利害を考えない、人の意見を聞かない、人の長所を見ない、怒る、威張る)です。

・自分に私欲ある如く人にも私欲あり。自分に意見ある如く人にも意見あり。自分に欠点ある如く人にも欠点あり。

・論語の中に「己の欲せざる所、人に施すことなかれ」という有名な言葉があります。

「心身ともに健康な私、明るい家庭そして働き甲斐のある仕事を持つこと」が充分でないとすれば、今ある条件・環境を変えるために何を為すべきかをよく考えて、実施すべき項目を簡潔に羅列書きして、決心・覚悟して実行に移すことを薦めます。例えば次のような内容を吟味する。

① 自分は毎日の飲食を適正にやっているかどうか

② 毎晩よく安眠・熟睡できているか

③ 自分の心身に影響を与えているような悪習慣はないか

④ 適当な運動をしているかどうか

⑤ 自分は日常生活上の出来事に一喜一憂し易くないか

⑥ 毎日絶えず追及する問題を持ち続けているかどうか

⑦ 人に対して親切であるかどうか、誠実であるかどうか、ちやらんばらんではないか

⑧ 人格の向上に資するよう教養に努めているかどうか

⑨ 特に何か知識・技術を修めているかどうか

⑩ 自分は何か信仰、信念、哲学を持っているかどうか

⑪ 「良寛さんの戒語」で話してないか

口のはやき。手柄話。話の長さ。人の物言いきらぬうち
に物言う。へつらうこと。あなどること。人の話を邪魔する。
推測事をまことのように言う。物知り顔に言う。

⑫ 家庭で「三つのしつけ」(朝、オハヨウと挨拶する。ハッキリ、ハイと返事する。脱いだハキモノをそろえる。)を親子でやっているかどうか

まだいくらでも有ると思いますので、各自で自分なりの行動を振り返って下さい。

次に、自分を変えるための心得(変革のための指針)をつくりと味わってみて下さい。

① 悪条件の中で建設を推進できる者が真のリーダーである。
不足条件を整備していく。もとを“作る”ことこそ変革の

中心である。

② 変革とは、それを具体的に不動の決心・覚悟として確立しないと始まらない。

変革はまず一人から始まる。

③ 同志と協力者を一人ずつ増やしていくことが変革の過程である。

点から面へ、そして主流に。

④ 変革という本質的变化には時間がかかるのである。

自滅するな、そしてやめるな。

⑤ 着実に丹念に、一歩ずつ歩め、一口ずつ食べよ。

すぐできるところから、すぐにやるべし。

⑥ 他人や周囲は、言うことを聞いてくれないものである。

物事は思い通りにならないのが通常である。

⑦ 与えてもらうのを待っているばかりでは流されるだけである。

誰がやるのか？自分は何をやるのか？

⑧ まず自分が変われ、さらに一歩変われ。

それが変革の原動力である。

⑨ レベルの高い方が苦勞するのは宿命である。

真のリーダーにとって、困難と苦勞が生じなければそれは異常である。

⑩ 嘆きの人生か、楽しみの人生か、自分の意志でどちらにもできる。

何が真の損得なのか？かけがえのない人生にとって。

最後に、市井（せいび）の托鉢者である石川洋先生から教わった言葉を味わって下さい。

自己変革七則

心をかえると 態度が変わる

態度をかえると 行動が変わる

行動をかえると 習慣が変わる

習慣をかえると 人格が変わる

人格をかえると 運命が変わる

運命をかえると 使命が変わる

使命をかえると 人生が変わる

問題はどれだけ自分をかえるか

かえる積み重ねをするかである。

論語の中に、

「吾日に三省す、人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝うるか」

という言葉があります。勉強不足にも関わらずいろいろと述べてきましたが、一行でも「なるほどな」と思ってもらえましたら幸甚です。

井上昌幸

●いのうえ まさゆき 1940年1月1日生まれ。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21(滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合)専務理事、関西師友協会生活学塾講師、大津木鷄クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人

〈商家の家訓の話 第九回〉

近江商人の幼児教育論

末永 國紀



奥井金六豊章（「近江商人事績写真帖」）

天保年間（一八三〇年代頃）の近江国神崎郡川並に、奥井金六、号を豊章と名乗る近江商人がいた。兄の奥井新左衛門は、才気敏捷で呉服を京阪で仕入れて信越方面へ販売して家産を大いに増やした。業務の余暇には、和漢の書物に親しみ、とくに医薬知識に造詣の

深い紳商であった。

金六豊章もまた、孝慈勤儉であり、親に仕え、兄を助け、子を慈しみ、しかも商才に敏であった。天保の改革の一端として奢侈禁止令が布かれ、呉服物の使用が禁止された。この極端な禁令はいずれ弛緩するとみた金六は、人を

派遣して福島県川俣の平絹を買い集め、米沢・木曾を経て京都に運び込んだ。折柄京都では衣類に関する禁令は緩み、しかも絹布の価格は品不足のため騰貴したので金六は大利を得ることができた。

金六はこのように商機をみるに敏であっただけではない。天保四年の三七歳のときに、姉妹の心得にもなればと思つて記したという、幼児を中心とした教育論を書いている。「豊章教訓記」である。

その文頭で、「子ほどの愛はなし、その子に宝をゆずる事こそ願わしけれ」と述べている。つづいて子供に譲る宝には、二種類の宝があるという。

第一の宝は、明徳性名の本心から発する孝養をつくそうとする心である。

この本心は、とくに他から求めて子に与えるものではなく、生まれながらに備わっているものである。だから、大事なのは孝養の心を失わせないようにすることである。

第二の宝は、官禄財宝金銀田畑である。これも結構な宝ではあるが、本心の

第一の宝あってこそ意味のある宝であるから、二番目の宝ということになる。

本心という第一の宝を失えば、我が身を失い、家を失い、先祖の立派な業績に泥を塗ることになる。身を失うまでに至らなくても、いろいろと不幸せのできるものである。こうしたことを成人となつてから意見をしても遅すぎるので、子供のうちに教えることが大事になつてくるというのである。

金六は、幼少の時期の教えで大きな影響を与えるのは、父母や乳母であり、その心の持ち方や氣立てから発する教え論しが最根元であるといい、小児に對して大人がしてはならないことをいくつかの箇条に書き上げている。

たとえば、子供に成人のような振舞いを要求すれば、心のちぢこまつた者になることが多く、大人が他人の見ているところではいつもと違つて言動を飾るようなことをすれば、子供に人を偽る心を芽生えさせることになる。

あるいは、兄弟姉妹が揃つたときに一人は我が家の子、他の子はわが家の子でなく誰の子か、拾つてきた子かな

どと大人が戯れに語るのは、子供の心に争いや嫉妬心を引き動かすことになる。

さらに、大人が、人には礼儀正しい態度を持つる礼容のあることを弁えず、日常的に衣服髪形が自堕落であることは、子供に不行儀や無礼を教えることになる。

このように金六は、現在でも大人にとつて耳の痛い子供に接する際のベカラズ集を書き連ねているが、大切なことは、言葉よりも行為や行動で教えることであると次のようにいつている。「子を教ふるに言葉少なに身を以つて教ふべし、我が身の職分を励み勤べし」と語るのである。老若男女とも、それぞれが自分の職分や持前を守りさえすれば、家國は治まるものである。そうすれば、「もののおわれ」を知り、別に悪念邪念は生じないと述べている。

この辺りから、金六の言は、成人に向つての次のような発言に移つていく。すなわち、何時までも世の中は変わらず、平穩無事であり、変事は他人の身の上ばかりのように思い、我が身の上には生死は無関係と思つのは、衣食

に不自由しないことをいいことに、うかうかと暮らすからである。近親の死に會つて初めて行く末悲しく、越し方懐かしく思われるのは、飢えてはじめに食事の楽しみを知るのと同じことである。人生では、人の死や難事が付き物であり、明日のことは知れないものだから、常々から変事に備えておけば、人生は楽しく味わい深いものとなる。

ここにいたつて金六の幼児教育論は、「もののおわれ」や「無常」という彼の人生觀から発するものであったことを知るのである。

近江商人に學べ 末永國紀

●すえながくにとし11943年生れ。
同志社大学経済学部教授。経済学博士。
(財)近江商人郷土館館長。
著書／「近代近江商人経営史論」(有斐閣)、「近江商人」(中公新書)、「近江商人学入門」(サンライズ出版)



左端が松本氏、右から三人目が清水氏

環人会現場研修会7

「新江州」と「どっぼ村」の取組みを探る

◆日時／3月20日(祝金) 13:00~18:00

◆集合／長浜駅、現地

◆場所／新江州2階会議室+eプラザ、上山田どっぼ村

◆内容／1.「新時代を創るのは誰か」

講師／森建司、見学／eプラザ

2.「どっぼ村の取組み」

講師／清水陽介、松本茂夫、

見学／どっぼ村

◆参加／11名

●どっぼ村：住所／滋賀県東浅井郡湖北町上山田880
問合せ先／大戸洞舎内どっぼ村事務局
<http://doppo.jp/index.html/>



なかなか、いけます手打そば

環人会の現場研修会が実施された。
今回は、長浜地区の取組みを見学。

まず、森建司氏の「新時代を創るのは誰か」講演を聴き、eプラザを見学。

1. 新時代の幕開け⇨改革は破壊と創造だ。破壊すべきものは何か？ アメリカ型資本主義、大量システム・安物買い・新商品の洪水・過剰宣伝が元凶か。人生とは？ いのちとは？ 健やかに死ねる幸せ。創造すべきものは何か？ 精神・宗教・道徳。科学技術・産業のバランス感覚

2. どこまで、誰がやるか⇨改善⇨改革⇨革命。社会を変えるのは市民だ。過剰消費から正常消費へ冷静な買い物

3. 収入半分・支出半分・幸せ倍増
ーレジュメから内容を抜粋ー

どっぽ村に移動。上山田は山に囲まれた里。静けさが心をいやすヒーリング効果たっぷり。まずは農業法人大戸洞舎^{（大戸洞舎）}で、大工の清水陽介氏と農業の松本茂夫氏から話しを聞く。「人

間が生きていくには、家を建てて、米を作って、野菜を育て、ほんの少しのお金があれば生きていける。世界を自転車で回ったときに実感した」と清水さん。

「難しいこと考えないで、自然を先生にしていけば生きてゆける。農業でも結構豊かに暮らせます」と松本氏。ここでは、大工の仕事を教えてもらえ農業を実践し月10万円の給金がある。3年間修行をし、自分の家を立てれば卒業。現在数名の研修生が汗を流す。高学歴の人が多いそう。現場を見学、フォークリフトで移動できる？ 畳ハウスや下水を微生物処理した中水利用のトイレ、雨水利用のタンク、製材角材にかかれた設計図などを見学した。松本氏の手打ちそばも味わえる。予約をすれば食事も可能。新鮮野菜がたっぷり。ヘルシー＆おいしい。要予約。

eプラザを見学



講演を聴講



大戸洞舎にて



手前が雨水タンク、奥右手の建物が製材所、どっぽ村にて



みどりの川の きんしよきしよき

今関 信子



イラスト：千田 満

存在感のある人形に会った。見たのではない。まちがいなく会ったのだ。

五、六十センチの人形たちは、表情にも姿にも、媚びがなかった。嵯峨野にある私設の美術館にいた。

人形作家で館長の森小夜子さんに、声をかけられた。

「ごっかしましたか。」

ほとんどの見学者は、間近に人形を見るそつだ。人形たちは、部屋をぐるりと囲む棚にいます。

「下手に近寄れない空気を感じるの、ここにいますよ。」

私は人形たちに圧倒されて、棚から少し離れ、ぽーっとしていたらしい。

「外国の子どもに興味をお持ちなのですか。」

「民族衣装が面白いんです。でも、多くは創作なんですよ。」

「創作？」

心臓が激しく鼓動した。創作だったら……という思いが強く働いている。

私には以前から、気になる人たちがいる。ほとんどの人間は、見たことがないだろう。人と言っては、おかしいのかも

知れない。その人たちは、わたしたちのそばで、生きているはずなのだ。

妖精？ 日本の場合、恨み事がまどわりつくから、妖怪のイメージになるかもしれない。

この作家の手で、この作家の感性で、生み出される人形は、どんな形になるのだろうか。

あまねじゃく、さしきわらし、キムジナーなど、子どもの姿であらわれる妖精たちがいる。私は、あずきときの子もぎんしよきしよきが好きだ。

イメージが先行する人たちと、会えないだろうか。

逢魔時、どこからか、かすかに歌が聞こえてくる。

ぎん しよき しよき
ぎん しよき しよき
おごろは ゆかいな あずきとき
しよき しよき
しよき しよき あずきとき

歌つ子どもたちは、ハヤカイワナのよ
うな、ほっそりした体をして、みどりの

ろの水草の着物を身につけている。蛙のまどりに細くて長い手と足が目を引く。

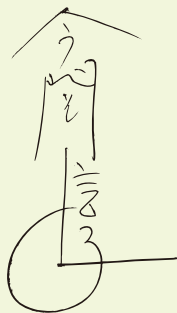
「おいらたちの仕事場は、あそこだよ。」

あずきときたちは、人間の国の浄水場に似た場所を指さす。ここに流れ込む臭い匂いのする水や、どろどろに汚れた水を、何百とつづ、あずきときが集まって、手分けして働いているのだ。

あずきときは、日本に古くから住んでいる妖精だ。私は、まだ違ったことがあるが、小さい手と足で、汚れた水をどくようにして、清めつつけているそうだ。最近、疲れて、歌声が小さくなったと、噂に聞いた。

ぎん しよき しよき
ぎん しよき しよき
おごろは ゆかいな あずきとき
なんとけなげで、いとしい妖精ではないか。

人形作家の気持ちが動いて、水をとき続けるあずきときに、たくさんの人があそびますよつに。



●いませきのぶこ1942年東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。

〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987年童心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995年国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で『守子屋』へ」2003年PHP研究所 など多数

M. Senda

●せんだ みつる1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオオアヒーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。2009年3月～5月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

- 環人会現場研修会7
日時：3月20日
- 主催：近江環人・環人会
- 対象：関係者および一般
- 演題：「新江州」&「さっぽ村」の取組みを探る
- 会場：新江州eプラザ、上山田とっぽ村
- 参加：17名
- 講師：森建司、清水陽介、松本茂夫
- 第一回EPRワークシヨップ
日時：3月31日

- 主催：もったいない学会 EPR部会
- 対象：会員、一般
- 演題：EPRとは何か？次世代へのキーワード―エネルギーの「質」と「日本のプランB」―
- 会場：東京大学山上海館
- 参加：60名
- 講師：青木秀和、石井吉徳
- 三國ロータリー
職場奉仕活動
日時：4月11日
- 主催：三國ロータリークラブ
- 対象：同クラブ会員
- 演題：「もったいない」の志から現代の経営課題に取り組むには
- 会場：長浜曳山博物館
- 参加：15名
- 講師：森建司
- 「現代社会と経営」
キャリア開発会議
日時：4月21日

- 主催：龍谷大学国際文化学部
- 対象：2～3回生
- 演題：現代の経済危機と持続可能型経営
- 参加：120名
- 講師：森建司
- コミュニティ・マネジメント特論
日時：4月24日
- 主催：滋賀県立立大学近江環人地域再生学座
- 対象：近江環人受講生
- 演題：新時代をめざすあなたに
- 参加：30名



- 講師：森建司
- 市民参加論Ⅰ～Ⅲ
日時：4月30日
5月14日
5月28日
- 主催：滋賀県立大学環境科学部
- 対象：1年生
- 演題：持続可能型社会を創るⅠ～Ⅲ
- 参加：50名
- 講師：森建司
- 第一回甲良町「老壮大学」
日時：5月12日



- 主催：甲良町教育委員会
- 対象：甲良町老壮大学生
- 演題：よき未来を残すために
- 参加：250名
- 講師：森建司
- アグリビジネスカフェ
日時：5月26日
- 主催：バイオビジネス創出研究会
- 対象：会員、一般
- 演題：ブルーベリーに育てられて
- 参加：50名
- 講師：岩田康子



お知らせ

◆安城市環境講座

・第5回／7月7日
「都会の百姓」白石好孝（農業体験農園大泉風のがっこう園主）
・第6回／7月21日
「日本の農と食をどうするか」長野麻子（農林水産省秘書課課長補佐）
・第7回／8月7日
「日本の森林と林業の現状」小木曾亮市（根羽村長）
問い合わせ/安城市役所 ☎0566-76-1111

◆“まほろばの会”発足

滋賀県守山市の「多世代交流事業プロジェクト」の趣旨にそって東門院のまほろば茶論に参加する会。
問い合わせ/事務局 ☎077-582-3123

◆比良里山クラブ会員募集

比良里山クラブと、赤シソを栽培し、赤シソジュース「ヒラペリラ」をつくる比良の元気なシソをつくる会が会員を募集中。問い合わせ/三浦美香
<http://hira-satoyama.teanifty.com/blog>
<http://hira-perilla.green.coocan.jp/>

◆水と緑・安心の野洲会員募集

滋賀県野洲市の環境基本計画推進会議では環境やエコに興味がある方の入会を募っている。
問い合わせ/事務局 ☎077-589-6431
kankyou@city.yasu.lg.jp

◆「調査月報」に環境経営が中小企業にもたらす可能性(弘中史子氏寄稿)掲載

日本政策金融公庫が発行する「調査月報」に滋賀大学の弘中准教授が執筆。

◆ファーマーズファッション

滋賀県立大学では大学と地域の連携における交流事業として、ファーマーズファッションを提案し試作発表をした。高島市の地域地場産業振興センターにて。クレープ生地を使ったオシャレな農作業着。

◆守山野外美術展(開催済)

「お寺deアートin東光寺」
題した若手アーティスト19名によるアート展示。ご本尊からお墓までアートになった。
問い合わせ/東光寺
<http://openart.exblog.jp/>

◆こんぜ鳴谷棚田のあかり2009

粟東市荒張字向畑（道の駅こんぜの里りっとう手前）地区で路地行灯が棚田の水面を幻想的に彩った。一夜限りの“棚田のあかり”。（5月10日開催済）
問い合わせ <http://narutani.shiga-saku.net/>



ニュース

【守れ地域医療「住民参加で自立策を」】

滋賀県健康福祉部参与の吉川隆一氏が医療側と住民との一体が必要と話す。米原市の地域包括センター伊吹の取組みも紹介。（京都4月14日）

【手作りで田舎暮らし実現】

高島市マキノ町在原で廃屋の茅葺民家を買い取り自ら改築した福井朝登さん（36）を紹介。高齢地帯で自給自足で暮らし、結婚。嫁は「在原の奇蹟」と呼ばれ、長男の大吉くんは「在原の星」と呼ばれている。（京都3月26日）

【自転車って楽しいよ】

「自転車の魅力を多くの人に知ってもらおう」と、輪の国びわ湖準備会主催によるびわ湖一周サイクリングの一環として、草津市イオンモールで自転車タクシー『彦根りキシャ』の乗車会を開催。（朝日3月23日）

【自転車レーン周辺に整備】

国、滋賀県、草津市がJR南草津・瀬田駅周辺で自転車レーンを整備する。「歩行者と共存できる空間をつくりたい」と関係者。（京都3月12日）

【アーカスからエコ観光】

琵琶湖汽船は、浜大津アーカスに琵琶湖の自然や生活文化を観光資源として発信するエコツーリズムの拠点を開設する。アーカス2階部分に「地産地消マーケット」と「地元料理のフードコート」を設置。環境学習ツアーや街中散策などの情報集約機能も併せ持つ。来年度オープン予定。（京都4月26日）

【湖国にお笑いを】

ユーストンが主催するお笑いライブイベント「笑卵（わらたま）WAVE」を毎月開催。ライブハウス運営会社と松竹芸能が協力。問い合わせ ☎077-531-1770。（京都3月12日）

山室湿原

三山 元暎



さし絵：中川 善雄

田植えの終わった田んぼからカエルの合唱が聞こえ、流れのほとりにキシヨウブが咲くころとなった。草木が萌黄から深い緑へと、日一日と色を変えていく。この季節、わが家から目と鼻の先にある山室湿原を訪ねると、カザグルマが咲き、トキソウが淡い紅色の花を咲かせている。

枝の先に花柄をたし、その先端に花弁そっくりの八枚の萼をつけたカザグルマ。白く、端正で孤高な感じがする大輪の花だ。

白妙や名も涼しげに風車 露車

トキソウは一〇〜二〇センチほどの、どこか恥ずかしげに咲くラン科の多年草だ。七月から八月にかけて咲くサキソウは、白鷺が舞い降りる姿さながらでその名があるが、トキソウのほうは舞姿でなく、朱鷺の羽の色のよつだかみさう。

鶺鴒草の見上へくさの青むかひ

神田長春

山青葉に輝くミスゴケのじゅうたんの木道に腰をおろして待つこと数十分。ようやくにして羽化したばかりの真つ赤なからたをしたハッチョウトンボをみつけた。体長十三ミリほどと、トンボの仲間では世界最小の部類に属する希少生物である。わが青き空、わが青き山に囲まれた緑したたる小宇宙に、一瞬、さあつと涼風が吹き抜ける。

三山 元暎

●みやま もとあき 1940年滋賀県坂田郡山東町(現・米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なかがわ よしお 1936年生まれ。滋賀県展・長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

最近入手した、気になる本・CD・DVDをご紹介します。

BOOKS

天上の鼓



- 著者／畑裕子
- 発行／サンライズ出版
- 価格／1680円
- 内容／”古い”をテーマにした短編の現代小説集。滋賀県芸術祭小説の部で芸術祭賞を受賞した三編と書き下ろしを加えた七編が楽しめる。

「お金」崩壊



● 著者／青木秀和

● 発行／集英社

● 価格／720円＋税

● 内容／我々が豊かさの指標とするお金。「お金とはなんなのか?」。作者は説く。小さな自治体で地産地消のできる経済環境を再構築し借金の後始末をすること。スモール・イズ・ビューティフルだと。

琵琶湖をめぐるスニーカー



● 著者／山田のこ

● 発行／新評論

● 価格／1800円＋税

● 内容／NPO法人たねや近江文庫の「第1回たねや近江文庫ふるさと賞」で最優秀賞を受賞した作品。関東生まれの作者が湖西に魅了され、ブラリと近江220キロメートルをウォーキング。

● 第2回たねや近江文庫ふるさと賞作品募集中

● 問い合わせ／☎0749-4915002

http://taneya.jp/bunko/

ロハスの思考



● 著者／福岡伸一

● 発行／木楽舎

● 内容／キーワード「ロハス」をめぐって注目の分子生物学者である著者が考えた論考を雑誌「ソトコト」などに掲載したエッセイやレポートをもとにまとめたもの。坂本龍一・ヨニー・マリアとの対談も楽しこ。

ブルーベリーの実る丘から



● 著者／岩田康子

● 発行／創森社

● 価格／1600円＋税

● 内容／「この地であら生きていける」。ブルーベリーファームス紀伊国屋を支える社長・岩田康子の半生。離婚を機に移り住んだカントリーライフ

と彼女を支えたブルーベリー。

エコ民家ライフスタイル



● 著者／発行／鶴飼修

● 内容／東京生まれの作者が滋賀県彦根で暮らす、エコ民家ライフ。無理せず実践できてしまった、日本人だからできる「低炭素型ライフスタイル」。

湖北の森5



● 編集／湖北流域森林づくり委員会「湖北の森」編集部

● 発行／滋賀県湖北森林整備事務所

● 内容／”湖北の木を活かしたい。共通の想いを胸に活動を始め、三年が経過。広報やフォーラムなど多彩な活動に理解を求めるPR誌。

「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」の発行に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～MOH通信～」を発行する。

《 MOH通信概要 》

■目的

- (1) 循環型社会構築に向けた意識改革
- (2) 浪費型社会念の脱却
- (3) 人生哲学を学ぶ

■事業

- (1) 通信の発行及び出版
- (2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

T526-0111

滋賀県長浜市

川道町759-3

循環型社会システム研究所

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

e-mail:tsujimura@

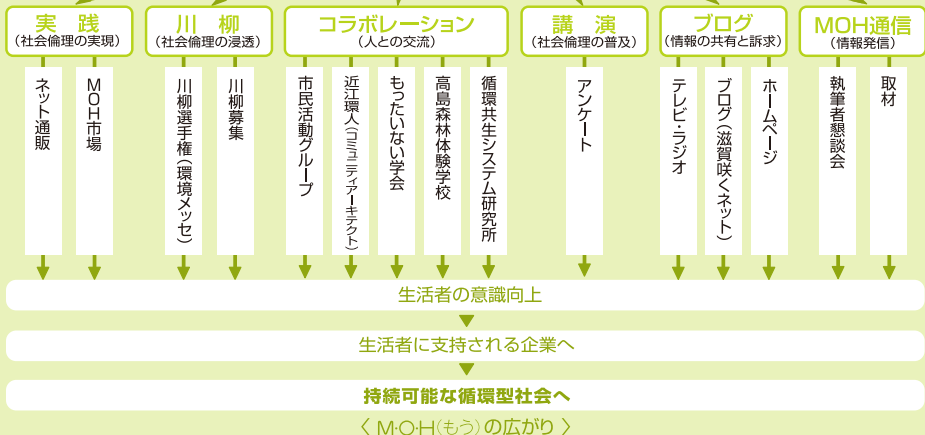
shingoshu.co.jp

代表:森 建司

担当:辻村 琴美

[M・O・Hコンセプトシート]

M・O・H=循環型社会をめざす言葉
(もったいない・おかげさま・ほどほどに)



読者の声

★琵琶湖周辺に暮らす人々の自然への想い、滋賀県のパワーを強く感じる冊子ですね。
宝塚市 土井けいこ

★滋賀は娘むこ殿の実家がありワクワクしました。元氣な滋賀「三C(チェンジ・チョイス・チャレンジ)」を思っております。
佐倉市 平田和子

★前田壯一郎氏とお話いたしました。『農』に信念をもち楽しく実践されていて感銘を受けました。
米原市 江竜喜信

★「幸せを実現する価値観とは？」に共感しました。森さんの高い志と熱い思いを感じました。
新座市 中山弘

★知った方々が掲載されていて親しい気持ちを感じました。
大津市 ウィリアムズ英美

★ほんもののコーヒーを求めて更なる追求をしたいと思えました。
大津市 吉川静雄

★「わが町、わが家で人生の…」興味深く読みました。
神戸市 西本柳江

★お送りいただきありがとうございます。
大津市 石丸 正運

★もったいないから、再利用しようと言うと「MOHの精神やね！」と返ってきました。
長浜市 青根 知美

★百年に一度の不況といっても、街にも家にも物があふれている…。ぜいたくな不況としか思えません。
京都市 岸田京子

★企業のS/R研究会で当センターの白石所長がお話を伺いました。アジア太平洋人権情報センターも行事を行っています。
東京都 朴 君愛

★現地研修を実施し「人を大切に」という信念のもと、本業を通じた環境配慮活動、環境経営が理解できた。
★eプラザが素晴らしく当社の取組みの参考となった。
★お付き合いして損はない。
★三方よしの心意気を感じた。

★工場内の環境への取組みを見たかった。

★経営のあり方を考えた。みえ・グリーン購入倶楽部の皆様(現地研修アンケート抜粋)

MOHせりゆつ

★MOH一度くじけず再挑戦

近藤 真琴 68才
★もったいない 仕事でコピーは ほぼコピー

石原 誠士 23才
★いにしへの 知恵と想いを見習って 今に生かそう 地球力

池山 邑華 18才
★ハンパねえ 死ぬほどあつい 温暖化

大山 修平 20才
★もったいない その一言で変わる未来

中嶋 麻里 21才
★ちょっとまで がつつかないで ほどほどに 鵜飼 としひこ 21才

★自分には 何ができるか 考えよう
石田 悠佳 20才

《次号予告》

2009年6月発行予定

■特集:めばえ【環境産業】

- 対談／「芽」～「花」咲く！イラストレーター 永田萌＋森建司
 - 寄稿／「エコトピアを語る」アーネスト・カレンバック＋内藤正明＋森孝之
 - 取材／水「琵琶湖を舞台に」琵琶湖汽船 中井保
 - 取材／「びわ湖・水の宝発見ツアー」MOH通信セクション
 - 取材／いやし「セラピーロード」高島森林体験学校
 - 取材／シネマ「見たい映画を格安で」シネファンくらぶ
 - 巻中／イラスト「めばえ」永田萌
 - 連載／通常通り
- ※ 敬称略、予告なく変更いたします

編集後記

私たちの祖先は、たゆまぬ労力と精神力で荒地を切り開き、灌漑をし“田”を起こしました。“要石”と呼ばれる大岩は田の守り神として崇拝されました。牛と暮らし耕作をしました。豊かな土はたくさんの実りを与えてくれます。『実るほど頭(こうべ)を垂れる稲穂かな』感謝し収穫を分かち合う。『温故知新』祖先に脱帽。(こと)

《M・O・H通信》受付中!

あなたも「M・O・H通信」を読んでみませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

電話番号、fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をお送りください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電

《M・O・H通信》申込書

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住所	〒		
電話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことには使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M・O・H通信 Vol.24 (通巻25号) 2009年5月末日発行 発行部数5,000部

●編集・発行/新江州(株)

循環型社会システム研究所
M・O・H通信編集局

代表 森建司
編集長 つじむら ことみ
編集協力 稲垣 重雄
取材 細井 美保

古田 紀子
清木 たくや
toshi

デザイン 伊達デザイン室
写真 辻村写真事務所

印刷 ブランセル
ホームページ ブランセル
ブログ 滋賀・咲くブログ

●執筆者懇談会

内藤 正明 畑 裕子
海東 英和 堤 幸一
山田 朝夫 進 ひろこ
下西 康嗣 中村 誠
末永 國紀 笹山 千怜
花田 真理子 奥山 武生
弘中 史子 結城 美枝子
今関 信子 松崎 和弘
山崎 隆 井上 昌幸
三山 元暎 辻村 耕司
加藤 みゆき 佐々木 洋一
清水 安治 徳永 拓美
檀上 俊雄 中井 二三雄
中田エリカ 山口 美知子

(順不同・敬称略)

●ご協力

滋賀県 近江環人&環人会
琵琶湖環境科学研究所 もったいない学会
センター 野洲生活学校
循環共生社会S研究所 EEネット
高島森林体験学校 中小企業家同友会
麻生里山センター

(順不同)

●支援

新江州(株)
〒526-0111
滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8681
★ブログ 滋賀・咲くブログ★
<http://moh.shiga-saku.net/>
★ホームページ★
<http://www.mohmoh.jp/>

※記事中で写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。